

---

# **緋弾のアリア × 特務零中隊**

spas12K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア × 特務零中隊

### 【Zコード】

Z3480Z

### 【作者名】

s p a s 1 2 K

### 【あらすじ】

警察直属でその存在を秘匿している組織『特務零中隊』。それに所属している人間と武僧とのお話です。

少しマニアックな銃が出てきたりもします。  
後オリキャラ重視の傾向が少しあります。

オリジナルヒロインは『クドリヤフカ』をイメージしました。

オリジナル主人公はフルメタの『相良宗介』を丸くした感じです。

組織名は『特務零中隊』は大阪のS A Tの旧名。

組織は『ガンスリンガー・ガール』の『社会福祉公社』を参考。

何か他作品を寄せ集めた魔作品です。

行ぐぜ野郎どもーー！

「めんどい任務やでこれは～」

高速で移動するヘリの中、伸びをしつつ間抜けな声を出す。

「そうですね～」

帰ってきたのは、これまた気が抜けた声。

「ルチアは相変わらずやな」

「そうですか～？」

いつもと変わらずのんびりな少女ルチアは自分の武器を点検していた。

ZB26チハの傑作軽機関銃だ。

腰にはZN61スコープ付き短機関銃、CN75拳銃。

「お前、ほんまにチョコの銃が好きだな」「ええ～まあ～」

白く長い髪を揺らして肯定するだけだった。

つてまあ、人のことは言えず自分の持っている銃も相当マニアックだ。

Stgw510というスイスの前主力突撃銃だ。

アサルトライフルという部類に入るが、.308ワインチエスターよりも強力な実包を使う。

腰にはP210、もちろんこれもスイス製だ。

加えて値段がどちらも滅茶苦茶高い。

「それと、任務中は「ホールサインで呼んでくださいですよ～」

「はいよ、ヴェスパ4さん」

「それで、よろしいのですよ～。健介さん」

「お前も「ホールサインで呼べや～！」

思わず突っ込む。

「あ～・わ～、なのですよ～」

適当な返事が返ってくる。

固い椅子にもたれて時計を見る。

「そろそろ時間やな

「ですね～」

その折だった。

「ヴェスパ3、4降下用意

ヘルの機長が告げる。

「了解や」「了解ですよ～」

その言葉を合図に、機体側部のハッチが開く。

そのまま飛び降りる。

続いてルチアも飛び降りる。

数十メートルの距離を慣性を受けて落ちながら目的の建物に着地する。

衝撃でコンクリが割れて屋上に大きなひびが入る。

「毎度すごい襲撃の仕方やな  
「ですね～」

屋上の扉を探して素手でぶち破る。

「わあ、やりまつ  
「了解だ～」

一人とも別々に移動する。

目の前のドアを開けると、黒スーツ姿の厳つい男が数人いた。

「誰や。どこの奴や！？」

こちらを向いて叫んだ男の体が穴だらけになる。  
そのまま横なぎに  $7 \cdot 5 \times 55\text{ mm}$  のフルサイズカートリッジ  
が吐き出される。

後ろの壁まで穴だらけにして男が全員倒れていた。

「相変わらず、この銃は強いなあ。惚れ直すわ」

そう呟いて、どんどん突き進んでいく。

次々と弾倉を取り換えて、銃撃の手を緩めない。

敵がいると思えば壁の後ろにいようが問答無用で撃ち殺していく。  
十階建ての建物の三階まで進んだところで奇妙な者を見つける。

「あちゃあ、やなもん見つけてもた」

ある部屋で不意に立ち止まる。

見つけたのは傷だらけの少女だった。

「お、まだ生きとるな」

首に手を当てるといまだ動きがあった。  
傷だらけで周囲に血が飛び散っていたが、どれも死に至る傷ではない。

「本部か？ 女の子を一人助けたんや、回収ヘリに医者乗せとい  
て」

「こちら本部、了解」

短いやり取りで通信が切れる。

「ヴェスペ4よりヴェスペ3へ、タゲは潰したよです~」

「よーやつた、ほな撤収しましょか

「了解です~」

その折、下の階から銃声が聞こえる。

「ヴェスペ4か？」

「私じゃないですね~。武偵の子たちです~」

「チツ、はようズラかろか」

あんまし面白くない連中がい来たものだと悪態つきながら、屋上  
まで戻る。

ルチアは先に到着していて、ヘリの誘導をしていた。

その数分後に撤収は完了して空を飛んでいた。

少女を拾ったという変わったことがあったが、まあ上出来だ。

行ぐぜ野郎やーー！（後書き）

またアリア関係なくて「めんなれー」。

## 高・校・編・入 命令！！

「はあ！ そんなん絶対嫌やでーー！」

「命令だ」

「ホワイ！ 何でそんな命令が回つてくんねん！？」

「機密だ」

髪を生やしたの中年男が機械的に言った。

「それに、ヴェスパ3、ホワイではなくフオワライだ」

「んなもん、訂正せんでもええわ！」

「いや、重要だ」

男はあくまで毅然として言い張る。

「だ・か・ら！ なんで俺が高校しかもく武慎高へ編入するんだ」

机をバンバン叩きながら講義する。

「がんばれ。ヴェスパ4とヴェスパ7も一緒だ」

もう決定された命令のようだった。

ついでに説明しておくとヴェスパ1～6はこの中隊での一人一人のサインだ。

ん？ 7？

「ストオオオツップ！ ヴェスパ7って誰や！ いつ増えてん！」

「昨日だ。そして昨日君が拾つてきた少女だ」

「ああ、あの子か？ それなら納得する……わけあるか！」

「うるさいなお前は、命令を出す遂行しろ」

「うええい」

全身全靈で願い下げたいが

目の前、天田中尉からの命令は絶対だ、従わなければならぬ。

「わかりやしたよ」

「素直でよい。そしてヴェスパーフだが君と同じ16歳。武器は口  
シア系だ」

「スペックと経歴は？」

「機密だ」

「？」

初めてのことだ、今までヴェスパは大抵の経歴とスペックは教えてくれた。  
だが、今回は情報無しときた。

「まいっか。ヴェスパ着任は理由と信頼が込みやからな  
「そういうことだ」

そうこうしていると、入り口の自動ドアが開く。  
そこに黒髪色の髪をした小柄な少女が立っていた。

「ライカ・スクリヤロフ女史だ」

「よろしくお願ひしま  
へふつ

入つて来ようとして盛大にこける。

「見ての通りドジだが。うまくやつてくれ以上

話も終わったので、ライカと呼ばれる少女を連れて会議室を出る。その後いろいろ身支度をした後、専用の車で遠くの東京を目指す。

さらば大阪

車内から小さく敬礼する。

と言うのもこの専用車窓は特殊ガラスで光が通らない、よつて外は見えない。

車内も運転席とは隔離されていて、座り方も向かい合ひう形だ。これは、車内でも会議を行うためだ。

今は三人の人間が中央のテーブルに銃を広げている。

俺はStgw57、90突撃銃とP210拳銃そしてspecter短機関銃、SSG300狙撃銃。

ルチアはZB26軽機関銃、VZ61短機関銃、CZ75拳銃。さらにはZVI対物銃まで用意している。

ライカはAK74突撃銃、PP2000短機関銃、SVD-S狙撃銃、スチエツキン自動拳銃。

V94対物狙撃銃まで用意している。

ここまで、よく装備が整えられたと感心しつつ、この先のことこ頭を抱えるのだった。

高・校・編・入 命令ーー（後書き）

すいません、まだ武僧が出ていませんーー  
しばらくお待ちを

## 武偵の実力を……

大阪～東京間揺られることが八時間。

新たな問題が、というか昨日からそつなのだが……

「えとお、金を貰えれば何でもする、極力人を殺すな、その他あ何だ？」

「いろいろあるみたいですよ」

手に持つ書類に目を通しながら、頭が痛くなるのを感じる。中尉から渡された数枚の書類にライカも目を通す。

「むにむに～、何でもいいですの～

座席に横になつて寝ていたルチアが投げやりに言つ。

「お前は起きる」

「康介さん私はもうそろそろ、飽きてきたです～」

「お前、やつと俺の名前を正確に言つたな

「あれ？ 私前回間違えましたか～」

「ああ、前回は『健介』って呼んだ

「同じですよ～、健介も康介も～」

鼻から直すつもりはないらしい。

あつそう、と言つて再び書類を読んでいく。

「うりゅ？ ハウさんは高校が面倒なんですか？」  
「まあ面倒つてか武偵校つていうのがなあ

康介が面倒くさがるのにも理由はある。

武僧というのは金さえ積まれれば何でもするといつ点。

成人にも満たない男女が武装している点。

紛いなりにも高い戦闘力や特殊能力を有している点。

そのほか幾つかの点からさまざまな組織・軍から目を付けられている。

例えば、シールズ、GIGN、空挺スペツナズ……かくいう自分達、零中隊も警戒している。

だからこそ康介たち三人を編入させたのだ。

任務は情報収集そして行動の妨害。

楽な任務ではなくすぐに終わるものでもない。

小耳にした話、最悪の場合は武力制圧の実行もあり得るとか。まあ、他の国の特殊部隊に攻め込まれるよりは幾分ましだろう。はあーと深い溜め息をついて書類を机に頬る。

「うりやー、大変そうですね

「だなあー」

笑っているが、こいつ等の御守りも頭が痛い。

何せ天然ゴーイングマイウェイの一入だ。

「どないしたもんかなー」

「何が大変なんですかー」

またムクリと起き上ったルチアが呟く。

自分たち以外の、ヴェスパ達が行つても良いはずなのだか。

「普通の高校ではないが年相応の学生青春を送つていい」

という中尉の言葉でこの三人に決まった。  
カバンから板チョコを取り出してかじる。

そんな折、車が止まって扉が開く。  
どうやら目的地に着いたようだつた。  
朝の眩い日差しの向こうに鳥が見える。  
あそこに問題の武僧あるのだ。

新学期に合わせて編入したので三人全員が一年だ。  
学部は都合上、強襲学部になつていて、  
各々が持つ銃器を詰めたバックパックや車輪付きのアタッシュケ  
ースを転がす。

校門が見えてきたところで、無線機に通信に入る。

「こちらヴァスパー、通信確認。オーバー」

「こちら本部。

現在地点の近くに自転車に乗つた学生もしくは武装された車両が  
見えるか?」

「否定。確認できません」

「ヴァースパーに指令。近くの建物の屋上より周囲を詐索し報告せ

よ

「了解」

「ヴァースパー、7は予定通り学校へ登校させよ

「了解」

通信が切れる。

一人の方に向きなおつて通信内容を説明した。

「じゃあ私たちそのまま登校します～」

「うりゅ～、頑張ってくださいコウさん」

「ライフルは持つてといてな」

「りやじや！　です」

ピシッと敬礼してライカが荷物を運んでいく。  
手伝う気が皆無のルチアは先に進んでいた。

「さてと……」

手近なマンションを見つけてその屋上まで移動する。

慣れた背中の縦長の黒いケースから一つの狙撃銃を取り出した。  
SSG 3000、御多分に漏れずこれもスイスの銃器会社に関  
係のある銃だ。

それを片手に双眼鏡で長方形の島を見渡す。

「あれやな？」

問題の人物はすぐに見つかった。

自分と同じ武偵校の制服姿の少年が猛烈な勢いで自転車を漕いで  
いる。

その後ろをセグウェイと呼ばれる乗り物が追いかけていた。

「ヴェスペーから本部へ、対象を発見。指示を

「可能なら救助せよ」

「了解。ですが何故ですか？」

「いくら武偵の生徒でも人であることに変わりはない。

それに武偵全員が悪とは限らない。見殺しにすることはない

「了解」

通信を切つて狙撃銃を構える。

光学照準器を通して、その光景は鮮明に確認できた。

「あのセグウェイ、UNIをくつ付けとるんか

なまじ速い動きゆえに捉えることが難しい。

距離と風と対象の移動先を考えて見越し射撃を行う。弾丸は移動するセグウェイの少し前の地面を抉つた。

「ちよい後ろか……」

そう思つたとき、信じられない光景が飛び込んでくる。建物の屋上から少女が落ちてきたのだ。

低高度のパラシュート展開。

さらに体を一回転させて手と足の位置を入れ替わる。

太ももの銃を取り出して発砲。

見事にセグウェイを破壊して少年を自転車から引きはがす。

直後に自転車は爆発した、少年が必死で逃げていた意味も分かる。

「二人は？」

一人の後を探すと爆発地点から近くの倉庫。

武偵校の運動場近くの建物に吹き飛ばされた痕跡がうかがえた。

「あれなら、助かつたやろか？」

そう思つた時、自転車の残骸の近くで数台のセグウェイが止まつてゐるのを見つける。

「しめた、止まつとる今なら」

状況を確認しているのか命令待ちなのか、止まつてゐる。目標に照準を合わせる。

引き金が落ち、弾が発射され、目標が飛び散る。

遊底を前後させ次の目標を破壊する。

五発目を打ち終えて弾薬を再装填した。

もう一度覗き込むと、目標は消えていて、一人が吹き飛ばされた倉庫を囲んでいた。

「遠いな」

余り慣れていない狙撃での距離は難しい。

そう考えたとき例の少年が入口から姿を現した。

躊躇無くシズエが火を噴いた

そう見えた瞬間に全てのセグウェイが破壊されていた。

「何もんやねん」

言いつつ無線で本部へ通信を入れる。

「状況を知らせよヴェスペ3」

「少年は無事やし、敵も全て消滅したわ」

「なら良い。学校へ行け」

「了解、交信終了」

電源を落としてから薬莢を回収する。

時計を見ると始業式は既に終わっている時間だった。

「あちやあ、初日から遅刻や

幸先が悪いにもほどがあった。

この先のことを考えると本当に頭が痛くなる頃だった。

## Let Shoot It !?

「うりゅう、大丈夫でしたか？」

「大丈夫と言つちゃ大丈夫だつたんだが」

自分たちが不思議な目で見られているのに薄々感じる。それもそうだ、編入して来たのだから自分たちの顔を知る者はいない。

学期始めだけれども一年だから自己紹介もない。

「まあ、暇にはならんと思つけどな、ライカ？」

「うりゅう、そうですね」

ちなみに後ろの席のルチアは机に突っ伏してもう寝ている。俺の荷物は女子寮の彼女達の部屋に置いてあるらしい。

時間に余裕がなかつたので直接来てしまつた。

背中に背負つてる縦長のケースも目立つてしまつている。

ふと、隣の生徒も机に突っ伏しているのに気が付く。寝ている、というよりも落ち込んでいる。どす黒いオーラが彼を覆つていた。

(話しかけ辛いな、おい)

右隣はライカだ。

「君は狙撃科の人？」

顔立ちの整つた雰囲気の良い男が話しかけてくる。

「ちやう、強襲科や」

「へえ、そなんだ。あ、僕は不知火亮。君は？」

一瞬、関西弁に驚いたようだが特に気にしている様子はない。

「俺は豊和康介や。よろしくな」

「じゅういちや、よろしく」

何気ない挨拶をしていると、活潑そつな奴が付か付いてきた。

「俺は武藤剛氣な。よろしくー。」

「お、おう。よろしくな」

武藤とこいつ男は横に突つ伏している男を指す。

「そして、あいつが遠山キンジ（とおやま キンジ）だ。女嫌いで根暗だがまあよろしく、してやってくれ」

「はあ」

「んで」

武藤が近づいてくる。

「お前の左の可愛い子、名前なんて言ひの？」

「マイツ、本物はそつちが目的か？」

「うりや？ 私？」

ライカが自分を指さして首をかしげる。

「そうね、名前なんていつの？」

「ライカです。よろしくです」

「そうか、ライカちゃんかよろしく」

武藤はどことなく嬉しそうだ。

もう一話題しようとしたとき、担任が入ってきて皆席に戻る。右と左はまだ机に突っ伏している。

「みなさん、席についてください。

今日は転校生がきました、って三人はもう座つてますか

康介とライカ、ルチアの方を見て担任が確認する。全員こっちを見て、ああなるほど、納得した。

「そしてもう一人の転校生を紹介します。神崎・H・アリアさんです」

扉を開けて桃色のツインテール少女が入ってくる。

(あれは、さつきの女の)

先ほどのことが思い出される。

「あたし、あいつの隣がいい！！」

入つて来るなり、ビシッと指をさして自分の席を要求する。その指の先には、その声に驚いて飛び起きた男。

遠山が田を丸くしていた。

「ほいじゃ、先生おれが変わりますー。」

遠山の横の席、康介と反対側の武藤が即座に手を擧げる。  
そそくさと武藤は席を移動し、そこに神崎が歩いてくる。

「これ、返すわ」

そう言って、遠山の机にドンッとベルトを置いた。

(コオ、新学期早々お熱いな)

その光景に邪な想像をしてしまった。

「理子わかった！ これフラグバッキバキに立つてやるーーー！」

「はあ？」

わけのわからない顔をする遠山。

「キー君ベルトしてない、そしてツインテールさんがそれを持つ  
てきた。

その謎はつまりー！」

「ーーーつまりーーー？」

全員が興味津々に聞く。

「キー君が彼女の前でベルトを脱ぐ何かをしたーーー！」

「なるほど、つまりは恋愛中と」

不知火が納得したよつに咳く。

「なにいい……」「影の薄い奴だと思つてたのに」「女嫌いじゃなかつたのか…」「不潔……」

クラス中が騒ぎ立てる。

もう暴走状態だ、てか先生傍観してるし。

その騒ぎを断ち切る、鋭い銃声が幾度となく聞こえた。

「れ、恋愛なんてくだらない！ 全員覚えておきなさい……！ そういう馬鹿なこという奴は、風穴開けるわよ！ ……！」

開いた口がふさがらない。

(えらい、ビーバップなどここに来てもうたな)

と心から思うのだった。

夕方、ライカとルチアの部屋から愛銃をとつて男子寮に来ていた。

「俺の部屋は〜、ここか」

ようやく自分の部屋を見つける。

中隊に居た頃のように一人部屋でないと残念だと思つ。誰かと相部屋らしい、カードキーを通して中に入る。

「邪魔すんで」

そう告げて玄関化で靴を脱ぐ。

「エリウス」

と、氣怠そうな聞いたことのある声が返つてくれる。

「ああ、遠山が相部屋なんか」

「よろしく」

愛想がねえな、と内心思つが気にしない。

特別人が悪そつでもないので、あまりあれこれ言わないことにする。

事前に教えられた部屋の間取りと一緒にだつた。  
とりあえず物置に荷物を入れて、クローゼットに服を入れていく。  
個別に四つ縦に並んでいる。

「たくさん銃を持つているんだな？」

暫く一いちりを見ていた遠山は話しかけてきた。

「ん、まあ俺の愛銃やな」  
「強襲科でも普通拳銃だけなのに、すごいな」  
「そうかあ。まあ趣味みたいなもんやけどな。ちなみに拳銃は  
これや」

そういうて脇腹のホルスターからM210を抜いて見せる。

「俺はこれだ」

そいつて、銀色に塗装された銃を見せてくれる。  
ベレッタのM92だった。

「悪くない銃やな」

「そつちこそ、とても高い銃じゃないか」

「せやな」

思つたほど無愛想でもないみたいだ、冷静な人物という印象も受ける。

「つと、銃の整備してもええか？ ちょっと今日使つた奴があつてな」

「構わないが……装備科に頼めばいいんじやないか？」

銃を取り出しつつ呟く。

「自分の命を預ける相棒や、人に触らせるくらいなら死んだ方がええ」

一瞬、遠山は驚いた顔をした。

「まあ、人それぞれだよな」

「せやで」

そう答えて、今日使つたSSG 3000を取り出す。

解体はしないで、銃身内部をブラシ付きの棒で擦り、遊底の可動部に油を差し込む。

光学照準器のレンズを特殊な布で磨き、銃全体を拭いていく。簡易メンテが終わつた時にベルが鳴る。

「俺が出る」

そういうつて、遠山が玄関へ向かつていつた。

扉を開くと同時に

「遅い！　すぐ出なさいよ……」

甲高い例のあの少女の声が聞こえてきた。  
例の子、神崎はズカズカと部屋の中まで入つて来るとテーブルを  
占拠した。

一瞬康介の狙撃銃を見てさらに上機嫌になつた。  
そしてこう高らかに宣言した。

「キンジ、あんた私の奴隸になりなさい……」  
「ＳＭプレイか？」

スコーンと胡椒瓶が飛んできて頭に直撃する。

「何すんねん！？」  
「あああ、あんたこそ何言つてんのよ……　次は風穴開けるわよ  
「思つたこと言つただけやのに……」

聞こえないよつ小声でぼやく。

「神崎、どうこう」とだ説明してくれ

困り顔の遠山が説明を要求した。

その遠山を無視して今度はこちりに向かつて来る。

「そこアンタ、その狙撃銃の口径は？」

今しがた整備を終えた狙撃銃を指さした。

「…308ウインチヒスター やけび。それがどないしたん?」

何故か神埼は笑みを浮かべている。

「あんた朝のチャリジャックを見てたでしょ?」

あのセグウェイ付近に落ちていた弾丸を調べられたか……  
時間が無かつたので薬莢だけを回収した自身に悪態をつく。

「わあ、しらんな」

あくまで、白を切ることにする。

なんとなくその方が身の安全を確保できそうな気がした。

「バレバレね。まあいいわ、あんたもついでに奴隸になりなさい

安全は確保でき無せうだ。

「まてまて、ついではないやろ」

「数は多くて困ることはないわ」

「俺の扱い雑いな、おい」

「ふう、それより客人に何か出しなさいよ」

会話が成り立たねえ。

「無視して話を進めるな!」

少し怒っているのか、遠山が声を荒げる。

「なんで、俺が奴隸なんだ」

「あたしには必要なのよ！ 強襲科に移つて私の組むパーティに入りなさい」

「強襲科が嫌で転科したんだ。そもそも俺は武僧をやめるつもりだぞ。」

「私には嫌いな言葉がある『無理』『疲れた』『めんどくさい』『

この三つは人間の持つ可能性を押しとじめる良くない言葉。それに長期戦も予想済み。うん、て言わないなら……」

「「それに？」」「  
「泊まつていいく！」  
「「はあーー？」」「  
「そして、出てけーー！」

アリアが机を叩いて立ち上がる。

「「W h y ! ! ! 」」

「分からず屋はお仕置きよー。そこで頭冷やして来なさいーーー！」

強制的に殴りだされ、何が楽しいかは知らないが男一人コンビで時間をつぶす羽目になつた。

大阪に帰りてえ！

## 相棒 ～「ソーリー」

神崎に追い出された後、遠山と一人でコンビニで立ち読みをしていた。

「今日は厄日だ……」

「ほんま、そうやな」

げんなりして亥へ遠山に、心の底から回意する。

「朝からひどいスタートだつたぞ」

「まあ、遠くから見てたんやけどな」

「そりしきな。助けてくれたのか？」

神妙な顔で遠山が訪ねる。

「一、二、三回あの車両を壊しただけや。

あの子……神崎がお前を助けんかつたら、まあ死んでたやうな

「そりしきな。助けてくれたのか？」

「それは、あの子に言つてやつ

「……」

何故か黙り込んでしまう遠山、まだ何か言いたそうだ。

それにも、直接彼女に感謝を述べれない理由もあるのだろうか？

「それで、見たのか？」

「？ ああ……」

見た、というのは、あれの事だらう。

俺は遠くから照準器越しに神崎の姿を捉えた。

同じく、遠山も振り返った時に神崎の姿を捉えた。

そして、神崎はパラシュートを操りながら、体の上下を入れ替えた。

当然その流れを見ていたわけである。

「ああ、見たんやけど。あれは、不可抗力やう？」

「だが、あの状態の俺は……」

「言わんでええ。確かにいまどき純白の下着は珍しい。

せやけど見てもうた物は仕方ない。彼女には諦めてもらおう

「実は……つて下着？ 何の話をしている？」

「いや、お前も見たんやろ？ そら空中で半回転したら見えてまうしな」

そう、彼女が体を半回転させたとき見てしまったのだ。  
普段は周りを覆つ布に隠れて見えない神域を。

高倍率の光学照準器越しに

「豊和？ 一体何の話だ？」

「神崎の下着の話やけど、お前も見たやろ？」

「……いや、その話では無いんだが」

「じゃあ何の話や？」

聞き返すと遠山は言つか言わないか悩んでいる顔をした。  
そして、何かを決心したように口を開く。

「その後の、倉庫から出たときの俺を見たか？」  
「まあ見たっちや見たけど、人間離れした技やつたな」

正直とも疑問に思つてゐる。

人間離れしたその動きわまるで別人のようなものだつた。

「そう、そのことだ。できれば人に言わないで欲しい」

不思議に思つた、武健な自分の手柄を宣伝した方が仕事もランクも上がるはず。

それをわざわざ秘密にしたいとは、何か理由があるのだろうか？  
だが、遠山の顔は真剣そのもの、あまり野暮な質問はしないことにしておぐ。

「別に他人の秘密を話す性分は持つてへん」

「なら助かる」

「ま、そんな事はええんやけど……」

「ああ……」

言葉の先を察したのか遠山も同じように溜め息をつく。

「あとちよいしたらア イツも帰るよな？」

半分希望を込めて呟く。

「だと思ひが」

心細げに遠山も答えた。

立ち読みしていた雑誌を変えようとした時、携帯の呼び出し音が鳴つた。

「もしもし、豊和ですけど？」

『びーぶるい・びえちーる、ハナセダ。今、お暇ですか？』

ライカの声だった、ビーブル……何だつて？

『あ、英介？ ルチアだよ～ちょっと部屋まで来てくれない？』

「名前くらいキチンと憶えて欲しんだが？」

『あと、ライカの言葉の意味はくこんばんわ～ですか。

ちょっとロシア語が混じってるみたいだけど気にしないで～』

「普通気になるが……」

「んじや～」

ブツツ、ツーツー。ほぼ一方的に電話は切られた。  
遠山に振り返つて言つ。

「ちょっと、用事ができたわ

「ああ、分かった」

遠山の返事を聞いて、コンビニを後にした。

**相棒～パーソナー（後書き）**

呼んでいただきありがとうございました。  
できるだけ原作を忠実にしようと思っています。  
質問があればお書きください。

感想待つてます！！

小ちなす「い奴！！

「準備はいいんやな？」

「いいよ～」「ぱじゃーるすた（どうだ）」

女子寮の一室、カーテンは閉められ電気の明かりが部屋を照らす。

風呂上りなのか二人の髪が少し湿っていて、体も火照っていた。バスローブ姿の二人はソファに座っている。

「後から文句は受け付けへんで？」

その言葉にルチアがふつと笑いを浮かべる。

同意したとみなしてライカを見る。

こちらもコクコクと頷いている。

「じゃあ……行くぞ」

手のひらを握り締めて拳を作る。

一瞬の沈黙。

それを破るように三人が声を合わせる。

「「「じゃんけんポン！…！」」」

三人の腕が付きだされる。

長い長い沈黙。

「うつわ、負けてもた…！」

「私も負けてしましました」

康介とライカはパー、対してルチアはチヨキ。

「にゅつふつふ、ではではアティオスです～」

うれしそうに荷物をまとめて行くルチア。

「畜生！ 僕が一番帰りたかったんやけどな！」

「後から文句は受け付けない、って言つたの恭介のくせに～」

勝ち誇つた顔でルチアがガツッポーズをとる。  
なぜこのような状況になつているのかといつと。

先ほど、中尉から伝達が来た。

その内容は、三人のうち一人は帰つて良いということだ。

中尉と副指令の少尉が検討したところ。

二人でよい。

そういう結論に達したらしい。

そして、その一人を決めるジャンケンが今しがた行われたのだ。

「そういう言つわけで恭介は部屋に戻つてね～」「へいへい

用事も終わつたので部屋を後にする。

あまり女子寮に長いもしたくないし、そろそろ頃合いだと考えた  
からだ。

「ぱいぱーい」「だすびだー」いや（せよつない）

一人とも手を振つて見送つてくれた。

男子寮入り口にて、偶然にも遠山と会流した。

「何があつたのか？」

「や、なんもあらへんかつた」

短い言葉を交わした後、部屋に戻る。  
扉を開けて中に入る。

部屋の中は真っ暗だった。

「いない、帰つたのか」

「せやろな」

靴を脱い廊下を进む。

ふとバスルームから鼻歌が聞こえてきた。

嘘だろー!?

そう思つて少しだけカーテンを開ける。

そこにはカゴに入れられた制服と二つの日本刀が置かれていた。

「遠山、あいつ風呂に入つとるで……」

絶望した田を遠山に向ける。

「ありえんだろ」

呆けたように咳く遠山、そこには不吉な呼び出し鈴が鳴る。田配せをして遠山に見にいくよう指示する。

無言で頷き、扉まで忍び行く遠山。すつと小さな穴から外を見る。

外に何者が居るのか確認した遠山がこぢらを見る。

(居留守を使おう)

(了解)

田の合図だけでやり取りする。

戻つて来ようとした遠山が段差に躓く。

「キンちゃんどうしたの！？ 怪我してない？」

扉の向こうから、済んだ綺麗な声が聞こえてくる。諦めて扉を開ける遠山。

「な、なんだよお前その格好は」

不安そうにバスルームを見ながら言つキンジ。

「あつ・・・これ、私授業で遅くなっちゃつて・・・キンちゃんに御夕飯作つて届けたかったから、着替えないで来ちゃつたんだけど・・・い、嫌なら着替えてくるよつ」

恥らしいながら説明する少女。

「いや、別にいいから」

「ねえ、キンちゃん、朝出てた自転車爆破事件の周知メールって

キンちゃんのこと?「

「あ、ああ俺だよ」

遠山が肯定すると、奇妙な悲鳴を上げて少女は飛び上がる。

「だ、大丈夫? 怪我とかなかつた? 手当てさせて」

手当どころ口実のもとに少女は遠山に手を伸ばす。

「俺は大丈夫だから触んな」

少女は少し残念そうにしたがやがつて拳を握りしめて宣言する。

「でもよかつたあ無事で。

それにしても許せないキンちゃんを狙うなんて! 私絶対犯人をハツ裂きにしてコンクリ・・・じゃない、逮捕するよ!」

さらりと怖いことを言つ。

というか背後から何かすごいオーラを出している。

「それより用事はなんだよ?」

「あ、あのこれね竹の子<sup>ごはん</sup>を作つたの、今旬だし。

それに私明日から今度は恐山に合宿でキンちゃんの御飯作つてあげられないから

「お、おお、ありがと。よし、用事は済んださあ、帰ろ!」

用も済んで帰つてくれると思ったが、少女はなぜか一人で語りだした。

「い、一日に2食も作つちやうなんて……

な、なんか私お嫁さんみたいだね……って何言つてるんだろ私は

あは、あはは変だね。変？ 編！？

うん。キンちゃんびいの思ひへ。」

猛烈な勢いで凄い事を話し出す少女に遠山も押されている。

「わ、分かつたからお手を取つてだよ！」

何とか帰つてもらおうと必死な遠山。

今わかつたが少女の名前は田舎とこひらしげ。

「分かつたつて・・・やれやまつキンちゃんお嫁・・・」

その時風呂場で水の落ちる音がした。

「？ 中に誰かいるの？」

「中に誰もいませんよ」

と、その時少女と田舎が合ひ。

「キンちゃんその人だれ？」

「口イツは俺のルームメイトだよ。豊和 康介つて人だ」

「そりなんだ」

田舎とくつか関の靴を調べる田舎。運よく神崎の靴は死角にあった。

「他には誰もいないの？」

「「誰もいない！」」

遠山と同時に声が出た。

「そう、よかつた」

遠山がゆっくりと扉を閉める。

白雪が遠ざかっていく足音が聞こえる。

心臓に悪い時間だつた氣がする。

遠山も安堵の表情を浮かべたが、すぐに元氣を引き締める。

そう、まだ問題は残っているのだ。

素早くバスルームに移動する一人。

音もなくカーテンを開けて刀に手を伸ばす。その折、神崎がバスルームから姿を現した。

「へ、へ、変態！」

「ちがう俺はこれを…」「ちやう俺はコイツを…」

そう叫んで遠山が刀を持ち上げる、その先にはトランプ柄のブラ  
が。

遅れて持ち上げた康介の刀の先には同じ柄のパンツがぶら下がつ  
ている。

「し、し、しつ」

わなわなと震えだす神崎。

「死ねえええええ！」

その後、気を失うまで殴られた一人は朝まで目を覚まさなかつた。

## 実力 そして 本名

「痛たた」

そこかしこが痛む体を摩つて起き上がる。  
目を覚ましたのは冷たいフローリングの上だった。  
隣で遠山も寝ていた。  
いや、気絶していた。

少しばかり腹も減つている。

あたりを見渡すと、昨晩に白雪が持ってきた竹の子弁当が見つかる。

「他人の物はあかんよな」

諦めて適当な物で朝食を済ます。

昨日出しつばなしだった狙撃銃をケースに入れて物置に片づける。  
代わりに少し小さな黒いケースを取り出す。

中から出ってきたのはシテス社製短機関銃 スペクトラ *Spectre*。  
ミニ・ウージー程度の全長だが装弾数50発を誇る複複列弾倉を

有する。

クローズドボルトで作動し、ハンマーをデコックして初弾をダブルアクションで発射可能だ。

イタリア製の銃だが少数がスイス軍で使われていたりする。  
命中精度もよく旧式設計だが、現代の短機関銃にも引けを取らない。

その銃を背中の上着とカッターシャツの間に装備する。

拳銃は左脇の下、自分が一番取り出しやすいところにある。  
時刻は午前五時。  
登校にはまだちょっと早い。

遠山を踏まないよう注意しながら進み、靴をはいて武偵校へ向かう。

向かうのは教務部

武偵校の三大危険地域と称されている。

(元人殺しも居るとか言つ噂やけど……)

もともと康介は警察機関の人間だ、武偵の姿は仮の物だ。ゆえに人殺し等の罪人は見逃すことはできない。

武偵校へ編入したのは、そういうた内部の情報を詐索するためだ。

「失礼します。2年A組の豊和ですが、担任は居られますか？」

扉を開けて中を見渡す、朝早い時間が大勢の人間が中に居た。ざつと、見渡していくが……

「はい、私が担任ですが」

「あ、先生。一、二質問があるんですが？」

「ええ、構いませんよ」

「ありがとうございます。聞きたかったのですが……」

あれこれと武偵について質問してゐる間に部屋の人間の顔を見ていく。

全員を見渡したところで折よく先生の回答も終わる。

「ありがとうございました」

「いえ、これから頑張ってくださいね」

「はい」

強襲科をして人気のないところまで歩く。

特にといった収穫は無かつた。

噂とは尾ひれが付きやすいものである。

人殺し、というのは多分だが民間軍事会社の元隊員の事だらう。

日常で人を殺せば犯罪だが、戦争では逆に功績となる。

民間軍事会社は現在で言う傭兵部隊だ、おそらく彼らの事を『殺し屋』と言う噂が流れたのだろう。

人を殺している事に変わりはないのだが……

法律上の罪は無いので捕まえることはできない。

「装備科は昨日見たし、どつかでのんびりしよかな」

肩透かしを食らつたような気がしつつも強襲科のある施設に向かう。

現在の時間は六時二十分。

やや小型の耐久性に優れたノートパソコンを開けて起動させる。すぐに照明が付き暗証番号を入力する。

番号が認証されトップ画面が立ち上がる。

いくつかあるショートカットの中からプログラムを開ける。

この時間に本部から指令や報告書が届く。

暗号化されたデータが一ツダウンロードされる。

別のプログラムを立ち上げて暗号を解読する。

特別な書式に変換されたデータを専用のツールで文章にする。手間が掛かるが、機密を守るために仕方がない。

一つ目の文書はこういう内容だった。

「初日の報告書は目を通した。以後も定期連絡を欠かさぬよう。以上、健闘を祈る。

追伸。極力怪しまれないため、武僧としての行動はするよつて。昨日自分が出した報告書への中尉からの返事だった。

もう一つは自分が資料を要求したものだった。

「電子戦処理班より

氏名 神崎・H o l m e s ・アリア 4世

かんざき・ほーむず・ありあ

生年月日 \* \* \* \* 年9月23日

身長143 体重??

#### 補足情報

父親がイギリス人とのハーフ。自身はクオーター  
ロンドン武偵局所属。尚現在は休職中

ランクは『S』

使用武器 M1911A1 スチールモデル／ステンレスモデル  
各一丁

小太刀 二本

一刃名 「

そのほか大量の情報が記載されていた。  
その中でも一番目を引いたのは……

(ほーむず? 四世?)

噂では聞いたことがあったが、まさか彼女の事だとは思つていなかつた。

必要な情報を読んだ後、二つの文章データを完全消去する。

「なんや、えらいのに目え付けられてもたなあ」

道の小石を蹴飛ばして悪態を喰く。

小石の飛んで行った方向を見ると暇つぶしに丁度良い設備が見つかつた。

屋外の射撃訓練場。

「標的を出す手目には……あれ、どないすんねやたつけ?」

機械を弄りながら悪戦苦闘する。

目標物を出現させるための装置があるはずなのだが……さつぱり使い方がわからない。

「まあ、ええか」

呟いてポケットからコインを取りだす。

朝日を受けて銀色に輝くそれを親指で弾く。  
高く空に打ち出された貨幣は大きな弧を描いていく。

「たとえ殺人者でも命は大事？　それが、人権？」

ホルスターから愛銃を抜き去り、撃鉄を起こす。

「せやけど、そいつ等は他人の人権犯してんねんで

一人呟き、引き金を落とす。

乾いた銃声。

放物線を描いていたコインが開く。  
そこで、誰かがこちらを見ているのに気が付く。

「誰や？」

振り返ると大きく黄色いヘッドフォンを耳に当てている少女が立っている。

背中には大きな狙撃銃、SVDドラグノフを背負っていた。  
ライカの持つているSVDの原型となつたモデルだ。

「狙撃科のレキです」

聞こえるか聞こえないくらいの小さな声でレキといつかの少女は言った。

「俺は強襲科の豊和やよろしく」

「……」

返事はなく、少し頷いて答えとする。

正直、掴み所がない人物だ。

一つ隣の射撃スペースに移動したレキは自然な流れで背中の獲物を取り出す。

手元の機械を操作すると遠くの方に標的が出現する。

目算距離にして約五百。

市街地戦の中距離狙撃の距離と同じくらいの遠さだ。

「……」

何も言わず安全装置を押し下げ、初弾を装填。  
そして、発砲。

燃焼された火薬のガス圧を利用して次弾が装填される。  
遊底の動きに合わせて引金が引かれていく。  
弾倉が空になると取り替えてまた撃ちはじめる。  
話しかけても無駄そのうなので射撃場を後にする。

遠山と神崎が一緒に登校してきたのが見える。  
ちなみにライカは寝坊して遅刻してきた。

五限目になり各科の授業に代わる。

「遠山どないすんの？」

「俺はクエストを受ける。

アリアはアサルトの実習中のはずだから、晴れて解放されるはずだ

「俺もついてってええか？」

「別に良いが、何故だ？」

「俺もあいつとは関わりとつない……」

遠山の了承を得て一人で民間からの依頼をこなす事にした。選んだのは、迷子の猫の捜索。比較的簡単そうなものだった。

(ホントに何でもすんねんな)

遠山が探偵科で依頼を受け、さあ外へ出よつとした時だった。

「キンジ、コウ」

待ち伏せしていたアリアが出てきて、二人とも膝から崩れ落ちる

「何で……ここに居るんだよ」

「あんた達が居るからに決まってるでしょ」

「答えになつてへん。それに授業はどうないしてん?」

「あたしはもう、卒業できるだけの単位を揃えてるもんね！」

あつかんべ、と少し舌を出すアリア。

その仕草に少し可愛いと思つてしまたのに違ひは無い。

だが、しかし！

いつ何時、二丁の銃をぶつ放して、日本の刀を振り回すかもしれない人物だ。

あと少しお淑やかなら、そう昨日の白雪ほど……いや、あれはあれでヤバいかも知れない。

「それで、あんた達はどんな依頼を受けたのよ？」

「E、Bランクの武僧にお似合いの奴だよ。帰れつ」

遠山が面倒そうに手を振る。

その、遠山の言葉を聞いたアリアが不思議そうな顔をする。

「あんた、今Eランクなの？ そしてコウはBランク？」

「そうだ、期末試験を受けなかつたからな。

どのみち俺にとつて武僧ランクは関係ない」

「ちなみに俺はBで普通やと思うやけど」

「まあ、いいわ。ところで受けた依頼は何なの？」

「お前なんかに教える義務はない」

一人そろつて立つと、神崎が一つの銃を太ももから取り出す。

「風穴開けられたいの？」

あまりにも言つことを聞かない神崎に、康介も堪忍袋の緒が切れ  
る。

「額でタバコ吸うコツ、教えたろうか？」

皿を吊り上げながら、神崎に拳銃の照準を合わせる。  
一瞬にして修羅場と化す。

「Bランクであたしに勝つ気？」

「やつてみるか？」

じりじりと間合いつと機会を見計らつ。

「ストップ、ストップ！ アリアも豊和も、落ち着けって。  
アリア、今日の依頼は猫探しだ」

「ふうん」

遠山が観念したかのようにバラしてしまった。  
だが、簡単な依頼だ神崎も引き下がるだろう。  
銃をホルスターに戻して、遠山と共に逃げるよひに歩き出す。  
それを追うように神崎もついてくる。

「なんで、ついてくんねん？」

「あんた達の武偵活動を見せなさい」

「断る、ついてくんな。遠山も何か言つてくれや」

「奴隸のくせに口答えしない！」

「だから何で、奴隸なんだよ？ 僕も豊和も奴隸になつた覚えはないぞ」

「あんた、私にあんな破廉恥な事していく、責任取らないつもり！？」

「それに、昨日は下着まで取ろうとした！」

「あれば、不可抗力だろ」

いや、不可抗力でないのは確かだろう。  
あの状況では怒られて仕方ないとと思う。

武器を取り上げるのではなく、逃げる」とを選択すべきだったと後悔している。

「とにかく、私には時間が無いの。

あんた達の行動を見て実力を測らせてもらつわ

その後、どれだけ文句を言つても聞き入れられず、結局神崎が付いてくることになった。

**実力 そして 本名（後書き）**

いろいろ変なお所があると思いますが、目を瞑つていただけないと幸いです。

## 居場所は火薬と硝煙の匂いの中に

夕闇に染まる街並み。

誰の田にも届かない世界、誰もが田を背ける世界。  
そこに、自分たちは居た。

「こ、殺さないでくれ！ 賴む命だけは」

両手を上げて地を這いずり回る男。  
その頭に亡靈スペクトラの銃口が向けられる。  
無慈悲に貫通していく弾丸。

「あんたに殺された人も、そう思つただろ？ な」

屍に向けられたその言葉は、男の過去を語るものだった。

「こちらウェスパー、田標を制圧。次の指示を」

抑揚も感情も無い声が無線機に向けられる。

「本部より3ヶ、撤収しろ」

「了解」

短機関銃の弾倉を交換する。

廊下に落ちた空弾倉が任務終了の音を鳴らした。  
血に染まつた床を踏んで外に出る。

遠くに見える夜景と、今ここにある現状は本当に同じ世界にある  
ものだらうか？

そんな事を考えても変わらない」とは知っている。  
けれど、考えずにはいられないのだ。

人として生きない人間。  
それが蜂<sup>ヴェスパ</sup>と称される自分達の道。  
建物を出て合流地点に歩いていく。  
防波堤の上から見えたのは、紅く美しい夕陽。  
それを背後に迎えの船が来た。

安心にも似通つた感覚を覚え、「コンクリートの壁に両肘を立てる。

「……？」

誰かの呼ぶ声がして我に返る。  
遠くには、いつの日か見たことがある夕陽が目に入る。

「「ウっ、ちょっと返事しなさいよー。」  
「ああ、神崎か？」  
「アリアでいいわよ。ボーッとしてたわよ」  
「いや、わりい。ちょっと考え方しててな」  
「そう」

今いるのは防波堤の上、アリアはちょっと前にあるテトラポッド  
の上に腰かけている。

キンジは、というともつと下の方で猫の捕獲に尽力していた。

今回の依頼報酬はすべてキンジの物と決めていた、あくまで康介  
は付添い。

最終的な仕事はキンジが実行することになっていた。

「何を考えてたの？」

「昔の事だよ」

それ以上何も言わず遠くに沈む夕日に向かなおるアリア。  
夕凪を受ける長い髪と夕日に映えるその姿は、とても絵になつた。

「アリア、俺とキンジを奴隸にしたいってのは、相棒としてか？」

「……そうとも言つわね」

「だが、相棒を作るのには時間が要る。息を合わせる必要がある  
からな。

お前は時間が無いといった、奴隸ならば息を合わす必要はない。  
だから、奴隸なれといったのか？」

「仕方がないじゃない！」

アリアが怒りを抑えた震える声で言つ。

「だが、ホームズと一緒にたのは相棒だ、奴隸じゃない。  
神崎・ホームズ・アリア、それは理解してくれ」

「あんた、何でそれを？」

「調べただけだ」

「速いわね」

「お褒めの言葉と受け取つておく。だが何故時間が無いと急ぐ？」

「それは……」

話したくは無いらしい。

「詳しく話したくないのよ。でも、どうしても必要なのよー。  
真実を探さなきゃならないのよー。」

「うひを向いて怒つたよつて呟く。

「言葉だけでも、思つだけでも、ざつしょつもない。  
世の中、道理は通らない。正義や大義は、ただの綺麗事。  
他人の力を我が物と考え、人を踏みにじる者がいる。  
そういう奴は眞実を隠す、金や欲に目が眩む」

それを無視して彼女だけに聞こえるよつづく。

「あんた、何が言いたいの？」  
「ある人の受け売りや。  
やけどな、お前の求める眞実にちょっと興味がわいた。  
つまりや……」  
「つまり？」  
「手伝つてやるよ  
「ほんとに！？」  
「ああ、キンジはどうするかは知らんけどな」

嬉しそうに微笑むアリア、さつきまでの剣幕はどこかに飛んで行つた。

やはり、女の子はこうこう表情がよく似合つ。  
その折、下に居た遠山が尻餅をついた、ざつやら猫に引っかかれ  
たらしい。

依頼も無事完了して、帰路につく。

ふと思つ、この判断は何に基づいて決めたのだろうかと

**居場所は火薬と硝煙の匂いの中に（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

ちなみに亡靈はM4Spectreの事です。

スペクトラはイタリア語で『亡靈』という意味なので、このように表記しました。

## 彼と彼女の思惑

依頼を終えた帰り道。

用事があると言つて、遠山はどこかへ行つた。  
アリアと一緒に寮へ帰ることになる。

黙つたまま歩いていると、先にアリアが口を開いた。

「あんた、ここに来る前は何をしていたの？」

「大阪の方で武偵をやつてたんや、普通やろ」

真っ赤な嘘だつた。

自分はそこで零中隊と呼ばれる特殊組織で動いていた。  
それは今も変わらない、武偵の姿は仮の姿だ。

「ところで、背中の銃はサブマシンガン？」

「ようつ氣づいたな。」<sup>（）</sup>答や

時折コイツの洞察力には感心させられる。

背中の短機関銃は外からシリエットが分からぬよう、つまむ隠  
していたのだ。

やはり、只者ではないのだろう。

「見たことない形なんだけど……」・ウージー？

「いや、イタリア製のM4 Super <sup>スペクター</sup>」

「あんた、本当にBランクなの？」

「もちろんやで」

「信じられない氣がするんだけど」

本当に鋭いと思つ。

あまり、相手に話せるとボロが出る可能性もある。

「それよつ、遠山さへいかぬことや。」

「！？」  
「そうよ、あのバカよ！　あいつは何で奴隸にならないのかしら

「色仕掛けでもしたらどうや?」

思い切り張り倒された。

「おみやげんでした」

わ  
！  
！

「まあ、あいつはマニアックな奴じゃ無せねいやしな。アリアの色仕掛けで成功するかどうかは……」

ドス！ ガス！！ バチーン！！！

メリメリメリ  
♪ハシケリの壁にめり込む轡♪

「モジド、」みんなさー

「ま」

ボロボロになつた本を弓削あつて部屋にいだつ着ぐ。

疲れたので、そのままベッドに寝てある。

やがてリビングの方が騒がしくなり目が覚める。

「一度だけだ」

それは遠山が降伏する瞬間だった

「一度だけ？」

「ああ、一度だけだ。強襲科に戻つてやるよ。

ただし組むのは一度だけだ。戻つてから起きた事件を一件だけ一緒に組んでやる

「……」

「だから転科じゃない。自由履修として強襲科の授業に行く。  
それでいいだろ？」

二人が睨み合う。

わずかな沈黙の後、アリアが先に動いた。

「いいわ。その一件で、あんたの実力を見極めることにする

「そうしてくれ」

アリアはソファから立つと荷物をまとめ始める。

「……どんな小さな事件でも一件だぞ」

念を押すように遠山が言う。

「そのかわり、どんな大きな事件でも一件よ」

それを言いぐるめてしまうアリア。  
中々達者だ。

「手抜きなんて、しないでよ」

玄関で振り向きそのままにアリアが言つ。

「ああ、全力でやつてやるよ」

遠山が眞面目な顔で答えた。

「なんやかんや言つて承諾したな」

「組むのは一度だけだ、それでアイツも諒めんだろう」

あくまでも、アリアとは組みたくないらしい。

「なあ、あの子が真剣に頼んでる。

そういう事を分かつて言つてんのか？」

「……」

「いへり、なんでも可懐やつや」

難色を示す顔を見て不思議に思ひ、何か隠している事でもあるの  
だろ？

「秘密にしている事があるのか？」

「人に話さないでくれると約束できるか？」

「当たり前や」

胸を張つて答える。

言いくそうしていたが、ゆっくりと遠山が口を開いた。

「とこづ」とだ

「はあ、そらまた難儀な

話を聞いて、開いた口が塞がらなくなる。

ヒステリア・モード

それが彼の持つ特殊な力らしい。

女性に對して性的な興奮を覚えることで発動する。

「せめて怒りや正義感が発動条件なら、よかつたのになあ

「本当にそう思つ。それに武僧自体、俺は嫌なんだよ……！」

「なして？」

「それは……」

更にも増して神妙な顔つきになる遠山に、これ以上知らない方がいいと本能が告げた。

「言いたくないんならそれでええ。

深入りして済まなかつた」

「いや、別に構わない。だが、そういう事なんだ」

遠山が落ち込んだよつて言つ。

「もう、寝るわ。おやすみな

「ああ、おやすみ」

ベッドに戻つて、今度は深い眠りにつく。

次の日、久しぶりに見た悪夢に起こそられるのだった。

## 彼と彼女の思惑（後書き）

ふと全話を読み直してみたのですが……  
酷い出来でした、申し訳ないです。

自分事ですが今日新たに資料本を買いました。  
「こんなにスゴイ 地上最強の特殊部隊」  
何を読んでいるのでしょうか、自分は。

## 自分の立場

私服の上に黒く丈の長いトレンチコートを着て、時計を見る康介とライカ。

時刻は午前十時ごろ、建物と建物の間を器用に登つっていく。三階ほどまで上がったところで、側面にある窓を開ける。音を立てずに内部に侵入する、続いてライカも中に入る。コートの裏側から銃を取り出す。

康介はM4 SpectreをライカはPP-2000を取り出した。

指を五本立て一本ずつ折りたたむ。

最後の指が折れたとき、扉を開けて制圧作戦が開始される。

「ライカ、左回りで進んで。昇降口で落ち合おう」「了解です」

背中を向けて別方向に移動する一人。

近くにあるドアを一つ開けて、中に飛び込む。

姿を確認される前に、銃の引き金を落とす。

中に居た四人の男は何が起きたのか分からないうちに倒れた。

銃声に気づいて駆け付けた男が、入り口で銃を構える。横に飛んでかわす。

机の陰に一瞬隠れた後、机越しに射撃する。

薄い木の板を破つて弾丸は男に着弾した。

男が倒れる音を聞いてから入口に移動する。

特殊反射鏡を使って外の廊下に誰もいないか確かめる。

一人、こちらに銃を向けている。

一步また一步と近づいてくる男。

銃を握り直そうとした瞬間に銃だけを突き出して撃つ。

頭と肩に当たり男は倒れる。

「ちよっと、手練れがあるな」

咳きつつ、インカムでライカに通信を送る。

「ヴェスペー、進行状況は？」

「現在C - R - 4で交戦中。……制圧完了」

「昇降口にて合流しよう。次はD - Rを制圧する」

「了解」

その数十分後、建物の制圧は完了した。

一階の裏口からひつそりと外に出て、黒のコートを脱ぐ。  
丸めて鞄に入れて、手に持っていた銃も入れる。

「とりあえず、連絡ポイントまで行こう」

「うりゅ、そうしましょう」

先程までの銃撃戦が、まるで何事でもないよう何処かに移動する一人。

そう、彼等はそういう側の人間なのだ。

「制圧完了しました」

「どうか、初の近畿外での作戦だったが上々だ。  
おつとそだ、ヴェスペーが現在そちらに向かっている。  
目的は心神の受け取りだ。気が向いたら連絡してやれ  
「……気が向いたら連絡します」

そう返答して通信を切る。  
伸びをして顔を上げた。

ここには、男子寮の自分の部屋。

「ヴェスパさんはどんな人なのですか？」

机を挟んで向かいのソファに座っていたライカが聞いてきた。  
先程の通信は、中尉と康介、ライカの三人の間で行われていた。

「ちょっと、変わった人やねん……うん、ちょっとな……」

最後の方は自信が無くなつてきて声がしぶむ。

「うりゅう、私の先輩さんなんですよね？ 会つてみたいですね」「会わない方が見のためやと思うで……」

彼女　　ヴェスパは戦闘よりも操縦士としての腕が高い。  
第一次世界大戦の複葉機から現在の第五世代戦闘機まで乗りこなす。

彼女に乗りこなせない物は無いと言われるほどだ。  
だが、人格はと言うと……

いろんな意味でぶつ飛んでる、表す言葉が無いほどだ。  
やりたい事は何でも実行する人間だ。

ヴェスパの隊員が寝ている間に、髪の色を絵の具で全部ピンクにするとか。

年下の隊員を人形にしたりするのはまだ良い方で。  
酷い時には中尉や少尉にまで、ちよつかいを出すときもあるらしい。

「うりや？ ルチアさんは面白い人だと書いていましたよ  
「そりやアイツだけや」

そう言いつつ、壁の時計を見る。

時刻は十一時四三分、そろそろ午後の授業が始まるころだ。

一応今日は休むと申請していたが、中尉からの指摘で午後は出席するよううこと言われている。

「学校へ行くか

「うりゅ、そうしましょ」

遅れながらも登校し、午後の授業を受けた。

そして、その日の放課後のこと。

強襲科に自由履修に来ている遠山は、やたらと人に絡まっていた。

「おうキンジイ！ お前は絶対戻つてくると信じていたぞ…」

「いいぞお！ 楽しませてくれ！」

「お前の居場所はここしかないよーーー！」

「ようキンジ！ お前みたいな間抜けでも相手してやるよーーー！」

そういう奴らを追い払って、強襲科を後にする遠山。

この後ゲームセンターに行くらしい。

行つたことの無い場所なので一緒に行く約束をしている。

肩を並べて歩いていると、門のところに特徴的なツインテールが

立っていた。

言つまでもなくアリアだつた。

「あんた、人気者なんだね

「嬉しかねえよ」

「あたしなんか、ここでは誰も近寄つてこないの。実力差がありすぎて、誰も合わせられないのよ」

「なるほど、文字通り『アリア』つてことか」

アリア、の部分を強調する遠山。アリアが感心したように呟く。

「そ、うよ、『アリア』はオペラの『独奏曲』って意味もあるのよ」

「ほんじゃあ、俺ら三人で『トリオ』つてどこか?」

思いついで小言を挟んでみると、以外にもアリアには好感触だったらしい。

「面白いことこのね、アンタ

「そら、関西人やからな」

一人で笑つていると、遠山は一人スタスターと歩いていく。

「ちょっと、どこ行くのよ?」

「ゲーセンだよ、ゲーセン」

「えせん?」

「ゲームセンターの略だよ。そんなことも知らんのか?」

「帰国子女だから、仕方ないでしょ」

ちなみに俺も知りません。

何せ市街地で活動するときにそういう店に出入りしたことが無いからだ。

やっぱり一般の人とは違うよな。

そんな事を考えていると、二人は自分を置いて口論しながら走っていた。

「え、ちょ、置いてかんといてくれー!」

全力で二人の後を追いかける。

目的地に着いた時には三人とも息を切らしていた。

「なんで、こんな、疲れな、あかんねん」

肩で息をしながら悪態をつぐ。

「はあ、はあ、それは俺のセリフだよつ」

隣でダラリと両腕を垂れている遠山が息も絶え絶えに言つ。

「キンジが逃げるからよつ！…」

なぜか一人元気なアリアが遠山の首を絞める。

「ギブ、ギブ！ 今やられたら死ぬ！ まじ死ぬ！… すぐ死ぬ  
！…！」

口から泡を吹き始めたところで遠山は解放された。  
店に入り、遠山がコインを交換してくるのを待つ。  
アリアは一台の箱みたいな機械に興味津々のようだ。

「これ、何？」

「俺も知らん」

「はあ、コウは日本人なんでしょ？」

「まあ、俺にもいろいろあるんだよ」

何かを察してくれたのかアリアはそれ以上何も言わなかつた。  
また機械に向きなおる。

どうやらその中のぬいぐるみに興味があるみたいだ。

あれ？

次第に口が逆三角になつていいく、よだれも垂らしかけている。

「それに興味があんのか？」

「……」

「もしもーし?」

「……」

遠山がどれだけ話しかけても反応しない。

「……かわいー……」

呟いたその言葉に、俺と遠山は笑ってしまった。

と、遠山が「マインをアリアに渡す。

「やり方が分からぬ……」

「教えてやるよ」

「本當!」

首をコクコクと上下させて頷くアリア。

「「ウは何かしないのか?」

「ああ、俺? あ~、じゃあ、あがしたい

適当にあつた機械を指さす。それは射撃ゲームだった。

「したい、ってやり方知らないのか?」

「

「ゲームセンターには来たこと無くてな、まあ教えてくれや

「ああ、わかつた」

それから、遠山に簡単な説明を聞いた。

要するに画面に出てくる敵に向けて引金を引けば良いらしい。遠山から貰ったコインを入れてスタートする。

次々に出てくる敵に向けて引金を引いていく。

「結構おもろいな」

「ありふれたものだと思うが」

「珍しいねん。つてあれ?」

画面にRELOADと赤い文字が浮かび上がる、弾切れらしい。手に持つ銃を確認するが、何処にもマガジンリリースが無い。弾倉を交換しない銃なのだろうか

「……」

諦めて自分の愛銃、P210をホルスターから取り出して撃鉄を起こす。

狙いを定めて……

「あほかあああーー!」

スパーーン!! と思いつ切り頭をはたかれた。

「遠山、何で止めんねん?」

「実銃向ける奴がどこにいるーー?」

「弾が切れても、仕方ない」

「画面の外に銃を向けたらいいんだよーー!」

「うやうやしく、康介は一般常識に欠けているらしい。

驚きの一顔を見せた康介に遠山も驚きを通り越して、呆れている。

「お前、今度からゲーセン行くときは俺に声をかけろ。

危険すぎる」

「おう、うううううわ

ハハハと豪快に笑いながら、後ろを振り向く。  
アリアの方も面白い事になるとになっていた。

貰ったコインの殆どをつぎ込んだにもかかわらず、景品が取れて  
いない。

あ、コインが尽きた、どうするんだろう?

一人で見ていると、アリアは何処かでお金をコインに換金してき

た。

あいつ、初めて来たんじゃなかつたけ?

彼女の並々ならぬ情熱は計り知れないようだ。

「あいつ、諦めるつちゅううことは無いらしいんだ」

「みたいだな」

「絶対お前を奴隸にするまで離さないと誓つて」

「……」

容易に想定できたのだろうか、遠山が少し青ざめる。

「ううこや、お前は何でアイツと組んだんだ?」

「ん~、雑多な理由はあるナビ。……まあワソクの武僧と組んで  
損は無いやろしちゃ……」

まあ、あの子の顔が真剣やつたて言つ理由もあるかな  
「なるほど」

とか話しているとアリアが一回田の換金へ赴いた。  
さすがに見かねたのか遠山が割って入る。

持ち前のプライドの高さから、離れようとしたアリアを遠山が押しのける。

一度ケースの中を見渡した後、どうやらターゲットを決めたらし  
い。

一つのボタンを順に押す。

ピロリロコ～、という効果音と共にアームが上がっていく。  
一回田のぬいぐるみの胴体をがつり捕まえて持ち上げる。  
うまい具合にタグと尻尾が絡んで三匹目がズルズルとついてくる。  
そして、そのまま景品口から三匹の白いネコみたいなライオンみ  
たいな顔が出てくる。

「お前天才やろ?」

「いや、偶然だよ」

「凄いじやない、流石あたしの奴隸ね」

「奴隸になつた気は無いんだが」

何故だろうか、他人が簡単に取つたのを見ると自分もできる気がする。

隣の換金機で千円札を崩し、台の前に立つ。

「おい豊和、壊すなよ」

「安心しろつて」

そう呟いてボタンを押していく。

アームが移動して、スルスルと降りていく。

「……」

景品にかすりもしないで、戻つてくるアーム。

「い、今のは練習や」

泥沼にはまる人の考えだつたが、今の康介は考える由もなかつた。

「……」

結局五回も台と換金機を往復することになつた。  
それでも、景品を得ることのできなかつた。

## 朝焼けに映る敵の陰

いつもの時間、五時きつかりに目が覚める。下の段で眠っている遠山を起こさないよう、静かにリビングまで移動する。

連絡用の端末を起動させ、電源が付くのを待つ。起動が終わると、昨日分の報告書を作成していく。

毎日の報告書はその日の夜か、次の日の午前に提出することになっている。

数日分を纏める事も可能だが、毎朝作成するのが癖になっていた。前日の作戦における、消費弾薬や所要時間、その他様々なことを記していく。

そのついでに、ある一文を追加しておく。

ゲームセンターとなる所を、遠山、アリア、と共に視察。

「ふいー」

文章を打ち終わったところで一息ついた。  
一段階に分けて文書データを暗号化していく。  
そして、出来上がった報告書を送信する。  
時間にして二十分程度、まだまだ時間はあつた。  
愛銃の「スベクトラ靈」を取り出して、各種動作を確認する。  
コレを握っている時は、何故か一番冷静になれる。

「そりや、ライカが羨ましがつとたなあ」

ヴェスパの仲間内で通っている愛称がある。

自分の愛称は『「スベクトラ靈』、愛銃と銃を握っている時の様子から付けられたものだ。

戦っている最中は笑いもせず抑揚の無い声になる。

そして自分の愛銃はM4 Spectre、イタリア語で『亡靈』。ほぼ自動的に自分の愛称は決まってしまった。

「ケンカ売られるようにしか思えんねんけどな～」

どうやら昨日、ルチアがライカに愛称の事を教えたらしい。そして何故か、ライカはその愛称が羨ましいそうだ。

「ゆうてえ、あいつの使つてる武器から考えたらあ……」

暇つぶしにライカの愛称を考える。

それもすぐに飽きたので、紅茶を入れることにする。

砂糖とミルクは多めだ。

加えて言つと、珈琲は今だ飲めない、あの苦さに耐えられないのだ。

それに珈琲は身長の促進を止めると言われている。

「アリアはコーヒーの飲みすぎで、ちっこいんかな？」

ふと頭に小学生程度の身長のアリアが出てくる。

あれ？ そういうや、ライカも小さかったような……

一人が出来つたら比べてみても良いかも知れない。アリアに殴られるのが容易に想像できた……

「あ、時間か」

六時二十分、指令文書や情報文書などが届く。  
中尉からの指令、もっとも最近は手紙のやり取りみたいになつて  
いる時もあるが。

「ヴェスパーへ

東京に着いてからの経過は順調と見れる。

なお、独断で『神崎・H・アリア』とパーティを組むことにした件。

それは、武偵行動の一環と認識する。

特別何かを考える必要はない。

以上

」

まあ、勝手にアリアと組んだ件については不問という事なのだろう。

特に目新しいものは無かつた。

続いてはライカ　　ヴェスパーの情報文書だった。

「電子戦処理班より

氏名 ライカ <本名は不明、所持物に記載されていた>

生年月日 不明

身長145 体重37 3サイズ - 69 / 51 / 72

補足情報

血液鑑定よりロシア人と東洋系の人間との混血と判定  
言語や動作、戦闘経験以外の記憶は欠落。

肉体は改造された後がを発見、処置施設は不明。

使用武器 AK74突撃銃、PP-2000 短機関銃、  
SVD S狙撃銃、スチエツキン自動拳銃。

V-94対物狙撃銃

」

(何もんやねん )

見ていて不審に思う、不明な情報が多くある。

いつも彼女にはこの疑問を抱く。

だが、天田中尉はヴェスパに着任させた。

どこの施設で肉体強化されたか分かりもしないのに  
わずか数名の戦闘員にもかかわらず、部隊として成り立つ理由。  
それは、ヴェスパの隊員は薬物と電気刺激、人工筋肉や機械化。  
複数の強化を肉体に行っている。

その強化手術が常人では成し得ない行動を可能にした。  
それ故に『中隊』の名を冠している。

「まあ、悪い奴では無さそうやねんけど……」

端末を閉じて紅茶を啜る、安物だが十分心を和らげてくれる。

「おはよう、早いな」

眠たそうに寝室を出てきた遠山が立っていた。

「まあ、朝は早い方やからな

朝の挨拶を交わした後、朝食をとることにする。  
遠山はコンビニ弁当の残り。

対する俺は、コツペパン・干し肉・干し野菜・塩・砂糖・水。  
あまり変わらない朝の献立だ。

腹六分目が何時でも戦える、それが康介の食事だった。

「……」

「どないした?」

「いや、何でもない……」

何故か俺の朝食を見て驚く遠山、美味しそうだつたのだろうか？  
などと、的外れな思考をする康介が先に朝食を終える。

「朝はいつもそんな感じなのか？」

「まあ、大体同じやな」

やはり美味しそうなのか？

「それより今何時？」

「七時半前だ」

腕時計を見たキンジが告げる。

まだまだ余裕だ、いつもよりのんびりと登校準備を済ます。  
余った時間を読書に回す。

そろそろだらうつという頃に、遠山も登校準備を終える。

「行こか？」

「ああ、行こわ」

玄関で靴を履いて扉を開ける。

「アリアが居らんとちょい寂しいな？」

いつもより静かな雰囲気につい言葉が出た。

「はあ？ あいつが居ると朝から〇〇の真似をする羽田になる

ぞ」

「なんやそれ？」

自分が居なかつた日の朝について説明を受ける。

中々笑える内容だつた。

他愛ない雑談をしながら、寮の門が見える所まで来た時だつた。  
一台のバスが停車するのが目に映つた。

「遠山、五十八分より前のは何分発や?」

「四十五分」

「そいつは絶対過ぎるとるよな?」

「たぶん」

「……」

「「ダッシュ!」」

同時に出了掛け声とともに駆け出す一人。  
滑るように門をくぐってバス停に着く。  
しかし、その時すでにバスは武蔵校へ向けて発進していた。  
シャツのネクタイを緩めながら落胆する。

「チャリで行くか?」

「生憎、始業式に星となつた」

そいや遠山はチャリジャックに遭つてたつけ?  
初日から運の無い奴だな。

「お前のチャリに乗せてくれ」

「そりこや、持つてくんの忘れてたわ

一限目の遅刻が確定した瞬間だつた。  
その折、遠山の携帯が鳴る。

「もしもし?」

「キンジ今どこ?」「ウサギにいるの?」

電話の主はアリアだった。

「俺も、豊和も寮の門にいる

「ちよつといいわ、この装備に武装して女子寮の屋上に来てー。」

「強襲科の授業は五限日だろ？」

遠山が不思議そうに尋ねると、アリアが声を荒げた。

「授業じゃない、事件よ！ あたしがすぐと書いたりべつべつ！」

何が起きたんだ？

## 朝焼けに映る敵の陰（後書き）

こんな作品にも田を当ててくれている人がいるとともに嬉しいです。  
本当にありがとうございます。

## 枢軸の怨念 伊・U

防弾ベストに強化プラスチック製ヘルメット、関節サポーター。その他、体中を固める。

C装備は武偵が突入作戦等で装備する物だ。

一瞬いつも着ている黒のトレンチコートを羽織るか考えたがやめた。

あれの方が性能は良いが、不自然だからだ。

「事件て一体なんや？」

「ああ、俺も事件としか聞かされていない」

全速力で女子寮の階段を駆け上がる。

屋上の扉を開けると見知った顔が三つ現れる。

三角座りで黄色いヘッドフォンをしているレキ。

背中にはSVD狙撃銃をしつかり背負っている。

そしてアリアの横に立つライカ、彼女もまた大きな狙撃銃を背負っていた。

SVDの特殊部隊用改良型SVD-Sだ。

ストックが折りたため、木製から樹脂へと変更され、精度と携行性が向上した。

どちらも精密狙撃には向かないが、動作の確実性と威力では言う事なしだ。

結構でかくてゴツイのだが、ライカの銃はグリップ角度が調整されている。

「体格に合つてねえな」

ぼそりと呟く、ライカは聞いてないだらうし、レキはヘッドフォ

ンをしている。

俺の声は届くまいと踏んでいたのだが……

「うりや？ セミオートの狙撃銃が使えない人の負け惜しみですか？」

「うおい、それ、誰から聞いた？ いや、あいつか

瞬時にルチアの顔が浮かぶ。  
一度締める必要がありそうだ。

「……」

聞こえているのか、いないのか、レキは相変わらず静かだった。  
誰かと通信していたアリアが立ち上がる。

「時間ね、この五人で追うわ」「何を追うのか教えてくれや、リーダー」「そうだ、状況説明くらいしろ」「バスジャックよ」「バスジャック？」「武徳高の通学バスよ。あんた達の寮を七時五十八分に出た奴よ

あのバスが？

「それにバスには爆弾が仕掛けられているらしいのよ  
「爆弾！！」

いち早くキンジが反応する。

この前の被害人もあるのだ。

「そうよ、班員は武偵殺しよー。」

「だが、奴は捕まつただろ？」「

「真犯人は別にいるのよ！

今は説明している時間が無いの、早く乗り込むのよー。」

ローターが風を切る音と共に一気のヘリが現れる。

武装は無いようだ。

素早く五人が乗り込むと、すぐにヘリは動き出した。

「見えました」

静かな声でレキが告げる。

「何も見えないぞ、レキ」

遠山が目を細めて言う。

レキの目線の先を見ると確かにバスらしきものは見える。  
だが、武偵の物か判断しかねるほど、小さい。

視力も強化されているので4・0あるが、それでもまだ遠い。

「レキ、お前の視力はなんぼほどあんねん？」

「左右共に6・0です」

返ってきた超人的な数字にアリア、遠山と顔を合わせた。  
ずっと窓の外を見ていたライカが突然扉を開ける。

「何してんねん、ライカ」

俺が叫ぶのを無視して、ライカは背中の銃を構える。

光学照準器を覗いた後、発砲した。

それに呼応してかレキも撃ちはじめる。交互に途切れなく撃ち続けていく。

「何をしているの！？」 答えなさいよ！」

弾倉を交換しているライカがこちらを振り向く。

「バスの後ろに無人の車が数台追いかけました」「そりゃ、銃を積んでいました」

補足するよ、レキが付け加える。

「ちょっと数が多いです」

「ええ、それにヘリの中からだと射角が

何台か撃破したようだが、まだ数がいるよ。だから適当な建物にライカを下すか？」

「操縦士さん、あの建物の上を通過してくれや」

「了解です」

短い答えが操縦席から変えてくる。

「ちょっと口う、何をする気なの！？」

「ライカを降ろすわ、いけるよな？」

「うりゅ、もちろんです！」

目標の建物も近づいている、落下傘を渡そうと振り向いたとき。

ライカがそのまま飛び降りようとする。

ヤバいって、それ特務中隊のやり方だから！

一般人に見せちゃダメだ！

「降|下、はじめ（ナチャーラ）」

「ちょ、おい、パラシュー...」

ロシア語を混ぜながらライカは降|下する。

そして、盛大に着地する。衝撃で着地点の周囲に亀裂が入る。

「あの子、何者なの！？」

唖然としてアリアが驚く。

「まあ……すごい奴なんや」

「ああ、だが今度はこいつの仕事だぞ」

冷静に遠山が告げる。

こちらもバスに近づいてくる、救出活動開始だ。

「あたし、キンジ、コウの順番で降りるわよ！」

「了解」

バスの真上ギリギリまで近づけて順に降りていく。  
長物を使うレキはヘリの中に待機している。

「さてと、バスの屋上には何にもないが……  
おい、遠山車内に何かあったか？」

「いや、見つからない」

と、なると後はアリアの調べている車体下か？  
だとしたら手が出したいが……

「あつたわ、バスの車体下よー。私じゃ手が届かない、誰か来て！」

「俺よりコウの方が降りやすいだろ、行ってくれ

「あいよ」

手綱を屋上に打ち付けて降りようとした時だった、誰かが屋上に降り立つ音がする。

「誰や？」

振り向くと紅い尻尾が見えた。

だがそれは、一人の少女だった。

紅く長い髪を後ろで一本にまとめている。

だが、その真剣な目は殺気に満ちていた。

手に握っていた銃をこちらに向ける。

T-333ソ連の拳銃、レベル2クラスのアーマーなら容易に貫通する。

「ちうー！」

Spectreを素早く取り出して撃つた。

それよりも相手の動きが速い、拳銃を一発放ちこちらを牽制する。牽制のせいですれた射線の隙間に入られた。

逆の手に小型のナイフが握られている。

こちらもナイフを取り出して応戦。

何とか間合いを離そとナイフを斜めに薙ぐが、紙一重で交わされた。

腰をひねって繰り出された相手の付きを何とか回避する。

相手の太刀筋に気を取られていたせいで、回し蹴りが腰を直撃す

る。

無理な態勢で繰り出したのか、そこまで重くは無かつた。  
右足で踏ん張り車外に叩き落されるのを防ぐ。

「クドリヤフカはどうだ?」

「誰の事や?」

「知らないのか……」

一步下がる少女、すかさず短機関銃の銃口を向けようと腕を持ち上げる。

それを、体全体をひねることで中断する。

少女がこちらに刀身を向けたとき、それが飛んで来たのだ。

「がつ、スペツナズナイフか!?

右肩が少し切り裂かれる、腕を持ち上げていたら確実に刺さつていた。

加勢に来た遠山の射撃に気づいた敵はバスから飛び、街灯の上に降り立ち、また飛んで見えなくなる。

「コウ! あれば誰だ!?

「わからん!! やけど、たぶん敵や」

「あんた達、何してるの!?

遅いわよ!」

いつまでも来ないコウに痺れを切らしてアリアがバスの屋根に戻つてきていた。

その、背中にライカの狙撃ポイントから死角を突くよう一一台の車が走つてくる。

「アリア、後ろや!..」

「えつ！ もやつ！…！」

無人のオープンカーから突き出たUゾーン。  
そこから吐き出された弾丸がアリアに命中する。  
屋上に叩きつけられて氣を失うアリア。

「遠山、アリアを頼む！！ あの野郎！」

怒りに任せて残弾全てを叩きこむ。  
エンジン部を破壊したのか車が炎上する。

「衝撃に備えてください」

無線機からレキのお落ち着いた声が聞こえた。  
橋に出たバスに並走するようにヘリが飛んでいる。  
伏射姿勢で狙撃銃を構えるレキ。

「おい、その銃は精密狙撃に向いてない！ やめろー！」

無線に向かって叫ぶが返事は無い。

「私は一発の銃弾」

代わりに聞こえてきたのはその言葉だった。  
直後に発砲音、爆弾装置一式が地面に落ち、そして海の中に落ちる。

最後に度派手な水柱が海中から立つ。  
何とか、バスの爆破は未然に防いだようだが。  
あの少女は？ そして、武僧殺しの正体は？  
彼らの目的は？

新たな疑問が頭をよぎつた。

## ANOTHER…? ~ 暫の虚 ~ 前編(前書き)

今回はオリジナルヒッソードです。  
少し変わった趣向になつておつますので、もしかしたら不快に思つ  
方も居られるかもしません。  
ご了承のうえで、読んで頂けると幸いです。

飛行機に乗ること数時間、隣の国よりも遠いところにある島。暑さと湿気ですぐに服がべたつ。

「暑いわね、まつたく」

肩に背負っているショルダーケースを地面に置いてベンチに座る。

「あの子は別の便で最初についてるはずだけ……」

あたりを見渡す、昼時だというのに人が少ない。サトウキビ畑が目の前に広がっている。視界が急に真っ暗になる。

「誰でしょう?」

「美佳ね」

「正解です。千恵姫さん」

振り返ると、自分の同僚が立っていた。ヴェスパ6・美佳、身長は普通くらい、スリムな体型。お淑やかで、冷静な少女だ。

時に変わった行動をするが、中隊随一の狙撃手でもある。

「とりあえず、泊まる所を案内します

「お願いするわ

田圃を抜け、人の通ることが少ない道を歩く。しばらくすると、人気のある道にでた。

バスに乗り、よつやく活氣ある街に着く。  
そして、あるホテルに着く。

「下見した感じはどうなの？」

「狙撃地点も決めました。ここです」

地図を広げて美佳が説明を始める。

わずか一日間でよく調べたものだ、と感心する。

「そして、回収地点はここ。夜中にここから船で逃げます。  
あとは天候を待つだけです」

地図のあちこちを指さす美佳。所々に色分けされたマークが記されてある。

「上等よ、ヴェスパ6。後は天気だけね」

「はい。それまでどうしますか？」

「とりあえず、作戦までは休暇みたいなものだと中尉は言つてた  
けどね」

天田中尉から指令を出されたのは一昨日の事だ。

内容は、ヴェスパ6の狙撃時の援護。

映画やアニメで狙撃手は一匹狼みたいに描かれているが実戦では  
そうはいかない。

火力を補うために数人のチームで移動する。  
今回の私の役目がそれだ。

「美佳は新入りの、ヴェスパ7と会つたことがある?」

不意にした質問に、美佳の動きが止まる。

「いえ、まだ会つていません」

「今、東京で任務中らしいの、武僧として動いてるわ」

「そうですか」

素っ気ない答えだつた。

「今回の任務は、結構危険ね。大丈夫?」

「はい、もちろんです。」

千恵姐さんも助けてくれるので心配は特になないです」

「そう」

飛行機の移動で少し疲れたのか、それでも考えすぎなのか。  
まだ午後五時なのにもかかわらず、体が氣怠かつた。

「千恵姐さん、先にお風呂をどうぞ」

「ええ、そうさせてもらひつわ」

勧められるがまま、風呂に入る。

服を脱いで、籠に入れていく。

疲れた体を洗い流して、その後はすぐに寝入つた。

次の日の朝。

「今週は晴れの日だけらしいわ」

「ですか……任務に支障が出ますね」

焦りと失望した美佳が嘆く。

「焦りは禁物よ、実力を半減させるわ

「分かつておつます。」忠告、感謝します

容姿端麗で大和撫子の姿そのもである。

窓の外を恨めしそうに睨む横顔は、自分が男であつたなら惚れていなかもしれない。

「今日は外でお店を回らない?」

ホテルの一階、日本食の料理店で朝食中に美佳に尋ねてみた。  
少し思案した後、美佳は口を開いた。

「外出するのは得策ではないかと思いますが……」

「でも、ホテルに一日中いるのは変よ。」

旅行客に紛れば大丈夫よ、その方が怪しまれないし

日を閉じて考える美佳。

悩んでくるらしく、なかなか返事が返ってこない。

「千恵姉さんがそう言つたら。

一人で観光でもしますか?」

「そうしましょう。

仕事の合間に休息は必要なの、一人で楽しみましょ

「はい」

朝食を食べ終えた後、地図を開いて今日のコースを決める。  
なるべく在日米軍人がいないところを選択していく。

「行きましょう」

「はい」

予定を決めた後、ホテルを出て市内を歩いていく。いくつかの観光名所を巡り、そこかしこの店のショーケースを覗いてホテルに帰る。

その、帰り道に一輪の花が咲いているのが見えた。

「綺麗な花ね、何て名前かしら？」

「デイゴの花だと思います、少し咲くにしては早いですね」

「そう、何でかしらね？」

「私達が来たからかもしませんね」

「どういう事かしら？」

「この花は『災い』が起きる前触れを予兆するそうです」

「確かに私達は『災い』を呼ぶわね」

「はい」

そう、今回の任務は米海兵隊隊員の狙撃だ。  
下手をすれば戦争になるかもしない。

対象の人間は、こここの土地で殺人を犯していた。

だが、日本で裁くことができない。

その身柄は本国に戻され、事件は有耶無耶（あやむゑ）になるだろう。  
これまでにも、幾つもの事件がそうやって闇に葬られた。  
彼らが数十年で起こした大小の事件は一十万件以上。

死者に至つては一千人を超えている。

それにも拘わらず、懲戒処分者が三百名ほど、軍法会議に欠けられたのは一人だ。

だが日本政府は大きく出ることができない。

だからこそ、自分たち特務中隊が動くしかないのだ。

「許せないんです」

不意に美佳が呟いた。

「奴らが、この土地を踏ませるわけにはいかない」

口調がだいぶ荒くなっている。

「熱くなり過ぎよ、冷静になさい」

「すみません、つい……」

この少女の気持ちはわかる、日本人としてこの事実を許すことは出来ないとも思っている。

だから、こそ失敗は許されない作戦なのだ。

「とりあえず帰りましょ」

「はい……」

取り乱したことが恥ずかしかったのか、返事に元気がない。

ホテルに戻って、報告書を作成し送信した。

後は、天候と日時の条件が揃つ日をじつと待つことになるだろう。

「気長に待つことになりそうね」

「はい」

まだ彼女に元氣がない。

そつと、近付いて後ろから抱きしめる。

「どうして、元氣が無いの？」

耳元でそつと囁きかける。

「今、今日この日でも私は任務を遂行したいのです」

「そう思つのも仕方がないわ、でも今は時を待つた方がいいのよ  
「分かっています、それでも……」

「今は寝なさい、それが今することよ」

「分かりました」

そう言つて、布団を頭からかぶる。

静かになつたが寝てはいないだろつ。

自分も布団にもぐり眠ろうとする。

けれど眠れない。

仕方がないので、上半身だけ起こして壁を背にする。

枕を抱きしめて、うずくまつた。

自然に今回の任務について考え始めてしました。

「彼女を抑えてくれ」

中尉が言つたその言葉は、命令ではなく血の通つたものだつた。

彼女は外国人に対してあまり好感を持つていらない。

愛国心が強い面があるのだ。

武器はすべて日本製、弾丸までも日本製の物を使う。

剣道や柔道などの戦闘術だけでなく、茶道や華道、書道にも通じている。

容姿も端麗、物腰も穏やか。

中隊の中では一番技能が高く、狙撃の精度は中隊長の自分でも及ばない。

そんな万能完璧に見える彼女でも弱点はある。

外国人犯罪者に対して異常なほど攻撃的になる。

こんなこともあつた。

中国人麻薬取引関係者の組織への襲撃時。

捕獲する相手まで射殺したのだ。

降伏しても関係なく殺していくのだ。

確かに自分たちが突撃した時には皆殺しが常。

しかし、情報を聞き出すときは一人だけ捕まえたりする。その時の彼女はまるで別人のようだった。

居合わせた自分も恐怖した。

「彼女だと米軍一個分隊を丸ごと潰しかねない。

彼女が暴走した時は止めてくれ」

そう、自分は彼女が今回射殺予定の米兵以外の殺傷を止めるために来たのだ。

(この子はどうしてここまで、憎むのだろうか？

そういえば、笑った顔を見たことが無いかも知れない

)

眠くなり頭がぼやける。

瞼が閉じて変な姿勢のまま、眠つてしまつ。

次に目が覚めた時には朝だった。

「美佳、おはよう。って、あれ？」

美佳の寝床には誰もいなかつた。

立ち上がりつて部屋を見渡してもどこにも居ない。

代わりに机の上に置手紙を見つけた。

『少し、行きたいところがあるので行つてまいります。  
夕方までには戻ります』

読み終わると同時に、彼女の武器が置かれているかどうかを確認する。

狙撃銃は置かれていた、常時携帯する拳銃だけがケースの中にな

かつた。

一人で暴れることは無さそうだ。

美佳の事は大丈夫なものとして、軽めの朝食をします。

「さて、暇な今日この日をどう過ごすか？」

天気は晴れ、夜になつても晴れだそうだ。

上空に雲が無いと今回の任務が実行できない。

衛星に姿を捉えられるからだ。

月明かりの届かない夜、その日に実行されるのだ。

目標の人間は夜、ある道を必ず通るらしい。

そこを狙撃。

後は回収へりと合流して本州へ帰るだけ。

「少し外で時間をつぶそうかしら」

自分のケースを開ける、中から出てきたのは89式小銃と9mm拳銃だつた。

拳銃を取り出して、予備弾倉を持ち出す。

それから身支度を整えて、十分後には外を歩いていた。

日差しが眩しいのでサングラスをかけている。

「暇よね

結局、日が暮れるまで大型の本屋で過ごしていた。

そのまま帰る気にもならず、適当な道を歩く。

人気を避けて、坂を上がっていくとどこかの岬に出た。ふとさびれた公園に着く、その向こうには海が見える。

「綺麗よね

鋸びたブランコに座りながら、水平線に沈む夕陽を眺め呟く。  
空気がおいしく、夕凪も気持ち良い。  
きーこ、きーこ、とブランコを揺らしていると、誰かが近づいて  
きた。

「誰？」

振り返ると、みすぼらしい姿の小さな少女が立っていた。  
手には使い捨てのカメラが握られている。

迷子の子だらうか？

「お嬢ちゃん、こんな時間に何してんの？」

「人を探してるの」

立ち止まり少女が答える。

「人を？」

「はい、ある人を探しているんです」

疑問に思つて聞き返すと、少女はそれを肯定した。

「お父さんやお母さんかな？」

迷子なのがもしけないと思つてそう聞いてみたが、少女は首を横  
に振つた。

「お父さんもお母さんも居てないよ」

普通の事のように言つ少女。

「「」めんなさい、変なことを聞いたやつたわね」

「ううん、いいの。

それよりも、お姉ちゃんは武偵の人?」「

「してないわよ。お嬢ちゃんは、武偵を探してるの?」

「うん」

「どうして探しているのかな?」

落し物か、何か調べものでも頼むのか、そう思って聞いてみた。

「私のお父さんとお母さんを殺した人を殺してほしーの」

「え？」

驚いて、言葉に詰まる。

すぐに落ち着きを取り戻して、詳しい事情を聞いた。

「なるほど、そういうことね」

「そうなのです、だから探してるの」

ある日の夜の事。

家族で楽しく食事をしていた時だつた。

ドアを壊して入ってきた外国人に、父親は頭を撃たれ死に、母親は弄ばれて殺されたらしい。

隠くれていた彼女は生き残つたらしい。

その後警察の人も来たらしが、結局事件は表沙汰にならなかつたらしい。

今は孤児院で暮らしているらしい。

「でも、その人たちの顔はわかるの?」

「う、ここに写真があるの」

肩から下げるカエル型のポーチから、数枚の写真を取り出す。最初の数枚は風景が写っていた、途中で人の顔が写った写真になる。

角が居れて薄汚れていたが、そこに四人の男が写っていた。そして、その一人の顔に見覚えがあった。

「つ！？」

「どうしたの」

「いえ、何でもないわ。驚かせちゃってごめんね」

そうそのうちの一人は、今回のターゲット。自分たちが狙う相手だった

事件の件数、被害者数などは調べた限りの本物を記載しています。  
多少の誇張はあるかもしませんがご了承ください。

この話に関しては批判や質問を受け付けますので、思ったことを書いて下さって結構です。

物語は後編に続きます。

無くした過去 飛べない空 消えない傷

まぶしさに目が覚める。

見たことがある白い天井、丸い電球。

体を持ち上げるが、動かない。  
どこにも力が入らない。

そして、自分が誰だかわからない。

ここは何処で、自分は誰なのか

「新しい道を歩む覚悟はあるか？」

渋いが温かみのある声。

自分を覗き込むようにして一人の男が立っていた。

「新しい道？」

「人の道を外れ人間として生きる道だ」

「？」

「その身は戦士の体となる、そういう事だ」

この人が何を言っているのか分からなかつた。  
けれど、ここで立ち止まるのは嫌だった。

「歩みます」

「良い答えた」

そう言つて、男の人は静かに立ち去つて行つた。

瞼が重くなつて閉じる、ぬくもりが体を包んだ気がした。

「ん、ああ」

眩しさを感じて目を開ける。

腕や足はちゃんと動く、記憶もある。

「気分はどうだ？」

「良好です。主水先生もんど」

ヴェスパの体を一般医に見せるわけにはいかない。  
今自分は特殊な施設の中にいる。

隣に立っているのは、専門外科医の主水先生だ。

「傷の具合は？」

「戦闘に大きな問題は無い。一週間もすれば、違和感も無くなる  
だろう。」

「適切な処置、感謝します」

「例には及ばん、お前が怪我をするとは珍しいな」

「相手の中に手練れが、それも自分と同じような人間が居ました」  
「能力者ではないのか？」

「否定です。そういう類の物ではなく、純粹に体が動いていました」

「そうか……。それよりもこの後任務があるらしいぞ」

「どういった内容ですか？」

「天田中尉の護衛だ。だが、装備は拳銃のみだそうだ。  
着替えはロッカーにある。更衣後に移管室に行けばいい」

「了解です」

主水先生が出て行つたあと、室内のロッカーに用意されている黒のスーツに着替える。  
あまり好きではないが、視線を隠すための黒のサングラスをかける。

(どこに行くんやろか?)

中尉も凄腕の人間だ、わざわざ護衛を付ける必要も無い気がするが……

何かあるのだろう。そつじゃなければ任務が来るわけがない。  
あれこれ考えるのをやめて尉官室に着く。

同じく黒のスーツにサングラスの天田中尉から簡単な説明を受け、  
車で移動する。

今回携行しているのはP226だ。

シングルアクションのP210はサイドアームズとしては優秀。  
しかし、拳銃のみを携行する場合はダブルアクションの方が好まれる。

すぐに撃てるからだ。

車で三時間ほど移動して、ある場所に着く。

新宿警察署

中尉は今日はここの人間に会つらしい。

「公安の課の人間がいるかもしねない」

移動中の車内、天田中尉は突然こう言つた。  
自分もその組織の事は知つていい。

『人殺し』を認められた人間たちが集まる集団だ。自分たちと似通つてゐると思う。

「彼等からの護衛ですか?」

「そうだ。特務零中隊は彼等には秘匿にされている。

ゆえに私の立場は便宜上、機動隊の警部。ヴェスパの隊員達は巡

査だ

「襲つてくるんですか?」

「まあ、わからんな

彼らの、いわゆる武偵のランクは『S』だったはず。相當に訓練を積んできた人間だといつ事は確かだろ。

「どうした?」

「いえ、彼らとやりあつて勝てるのかと、考えておりました」

「安心しろ、そのための君たちだ」

「分かつております」

そうヴェスパの体は日本を守る為に作られたもの。そう簡単に負けない、負けるわけにはいかない。

「後、ヴェスパ7・ライカの事なんだが……」

「何でしようか?」

少し考えてから中尉が口を開く。

「お前はこの前の事件で、ある襲撃者にあつたそつだな?」

「はい」

彼女の事を思い出す、中々の手練れであった。

身体能力も普通の人間のそれを逸脱していた。

「その時『クドリヤフカはどこだ?』と聞かれたそうだな?」「肯定です。ですがそれが、ライカに関係あるのでしょうか?」「お前は、ソ連の宇宙犬について知らないか?」「存じません」

一瞬関係のない話のように思えた。

「詳細は省くが、その中の犬に『ライカ』という名の犬がいた。別の名前では『クドリヤフカ』と呼ばれている」「なるほど」

だとすると、あの赤髪の少女が捜していたのはライカの事かもしれない。だが、そんなことがあるのだろうか?

「まだ噂でしかないのだがな……」  
旧ソ連の研究機関がヴェスパと同じ人体改造を行つてているという話がある。

そして、その拠点が日本にある可能性が高いらしい  
「本当ですか?」

無言で頷く注意、おそらくほぼ確定した噂なのだろう。

「その上、そのことはロシアは好ましく思つてないらしい。悪ければ、特殊部隊『アルファ』が制圧に来る。  
最悪の場合は『空挺軍第45独立親衛特殊任務連隊』だ  
「空挺スペツナズ!?」

ロシア最強の部隊だ、実戦経験豊富、老練な戦術。物量に任せるアメリカの部隊とは異なり巧みな行動をとる。一番戦いたくない相手だ。

「空挺に来られると危ない。いかにヴェスペでも経験が違いますぎる」

空戦海戦とは異なり、陸戦は装備だけで勝敗は決まらない。戦術や個々の技量、そして精神力も勝敗に左右する。

あのベトナム戦争での事だ。

最新装備の米軍は貧弱な装備のベトナム軍に勝てなかつた。自然の土地を上手く活用する戦法に多くの犠牲者が出たのだ。

「それは、避けたいですね」

「だからこそ施設を見つけ次第、制圧作戦を開ける」

彼らは危険すぎるのだ。

「さて、難しい話はこれで終わりだ。そろそろ着く。」

その数分後には、署に着いた。

中尉は署長と面会して様々な事件について話していた。

「はい、その女性については今情報を集めていますが……  
「政府に圧力をかけられている  
か？」

中尉がウンザリしたように言つ。

何時まで経つても政府の裏工作には手がある。  
金にしか興味が無い人間は心底腐っていると思う。  
なぜ国民から税金を貢っている立場であそこまで偉そうにできる

のか？

「この組織が守るのは国民だ  
国を売る役人ではない

それが中尉の口癖だ。

「こちらも武偵の人間を中心とした隊を組織して捜査しているの  
ですが……」  
「金で動く彼らを信頼できるのか？」

「それは、その

「

中尉の問いただしに、署長がうろたえる。  
それから数時間後、署を後にした。

車に乗って帰る際に、署の入り口にとある人物を見つける。  
長い桃色の髪を二つに括った少女、アリアだった。  
キンジも一緒にいる。

（署に用なんてあんのか？）

疑問に思いつつも零中隊東京支部まで戻った。  
その日の夕方、寮に帰るとキンジが先に部屋にいた。  
そして、アリアの額の傷と母の事を聞いた。  
自分達が探していたパートナーではなかつたと嘆いたことを知つ  
た。

無くした過去 飛べない空 消えない傷（後書き）

サブタイトルはあるゲームの主題歌の歌詞からとりました。  
分かりますか？

何気深い言葉だと思っています

消える飛行機雲（前書き）

ハイジャック編へ突入です

## 消える飛行機雲

「そうか、俺等は探していたパートナーとちやうつてことか……」

夕陽が差し込む部屋の中で俺と遠山はテーブルを挟んで向かい合っている。

どうやら、彼らが署に入つて言つた理由はアリアの母と会つためだつたらしい。

そして、その母親は

「懲役864年？ 不審な点があるやうに…」

机を叩いて苛立ちを紛らわす。

「だが、俺たちにはどうする事も出来ない。

これで良かつたんだよ

「……」

彼女の真剣なそして決意の宿つた顔が思い浮かぶ。  
あの自信ありげな出していた額を前髪を隠していただけに。

「すまん」

手を離す。

自分だつて本当は真剣に彼女の事を考えているわけでも無い。

あくまで興味本位だつた。

任務で武僧として活動する、その一環として行つただけだ。

自分の立場はあくまで特務中隊。

彼女を心底守りたとしたわけでも、全力で助けようとしたわけでもない。

その程度の覚悟だったのだ。

「シャワー浴びてくる」

「おう、痛くなかったか？」

「大丈夫だ、それにコウでも取り乱すんだな」

「ああ、まあ一応な」

少しだけ笑つてキンジは脱衣所に入つていった。  
その日の夜はどことなく静かだった。

翌日

自分とライカは武慎高の教室ではなく、羽田空港の第一ターミナルにいた。

(あれが今回の目標やな?)  
(そうだと思います)

小声でライカと確認を取る。

いつぞやの黒いスースツ姿で手には大きめのアタッシュケースを持つている。

目の前を一人の少女を連れた、五十代中太りの男が過ぎ去つていく。

(うりや？あの少女は指令書に写真がりませんでしたが？)

(たぶん、慰み者や。今回の標的は小さい子供に興味が有るゆうてたし)

(なぐさみもの？)

(子供は知らなくていい)

政府関係者の人間。

約数十億円の税金の横領と、麻薬・売春の幹部だ。  
自身はロリータコンプレックス。

国外への長期滞在を日論んでこの飛行機に乗るらしい。  
護衛はいない、この機内で暗殺するのが任務だ。

(あの少女はどうしますか?)

(保護する。あいつが手を出す前に片づける)

ANA600便ボーイング737-350、イギリスのロンドン  
行だ。

ケースにはいつもの銃が入つてある。  
約数分後には機内にいた。

「えらい、豪華やな」

「うりゅう、そうですね。ベッド(べりばーち)もフカフカです」

ベッドの上で飛び跳ねるライカ、今日は私服で青いワンピースだ。  
身長も仕草も幼いのでとても17歳に見えない。

というか、実年齢が不明だ。

本当に子どもかも知れないのだ。

「とりあえず着替える」

そう言って黒のトレンチコートを投げ渡す。

こういった場所で軍人が来ているような特殊な服装は不便だ。

その点この黒のコートなら少し変だが気に留めない程度ですむ。  
任務の後は折りたたんでケースに入れておける。

この「コード」だけで防弾レベルは？ - A。

ちなみに、ヴェスパの象徴でもあり、儀礼的に着ることもある。

フライトから五分程度、そろそろ良い頃合いだ。

「ヴェスパ③から本部へ、作戦を実行します」

小型の衛星通信機にそつ告げる。

「こちら本部、了解した。幸運を祈る」

ヴェスパ⑦を引き連れて、目的の部屋の前に着く。  
聴診器を扉に当てて中の様子を窺う。

「突入」

低い声でそう告げ、扉を特殊機材で開けて中になだれ込んだ。

標的の男はベッドの上にいた、少女に覆いかぶさるように迫つて  
いた。

二人とも全裸で、振り向いた男が乾いた悲鳴を上げた。

「そのまま、手を挙げてベッドを降りる」

Spectreの銃口を向けつつ男を誘導する。

男は大人しく手を挙げながらベッドを降りて鏡の前に立つた。

「お前たちは誰だ！？ 私は

「

何かを言おうとした男は倒れる。

後を追つよつて二つの空薬莢が床に落ちた。

「ヴェスパ3より本部へ、任務完了」

「こちら本部、よくやったヴェスパ3。

到着地点にヴェスパ4、5が待機している

「了解。通信終了」

電源を切つて保護した少女に話しかける。

「君の名前は？」

先程まで一糸まとわぬ姿だったが、ライカがバスルームより持つ  
てきたバスローブを着ている。

怯えて震えている、やはり怖かったのだろう。

「……ボリク」

小さな声で呟いた。

白く長い髪にセピア色の瞳、小さな体に丸い顔。

「ヴェスパ7、この子を部屋に連れて行こう  
「分かりました」

少女を背負つて部屋へ戻る通路を歩いて行く。  
扉を開けて、一息つこうとした時だった。  
どこか遠くで、一発の銃声が鳴り響いた。

それは自分たちの銃じゃない  
招かれざる客が乗り合わせていたようだ

## 消える飛行機雲（後書き）

そういうえば、アニメ版で出てきた自衛隊の機体はF-15Jですかね？

ミサイルはAIM-9ですよね？

映像で判断しきれないです。

誰かご助言があればお願いします。

## 空の上で

額に嫌な汗が浮かんだ。

この機はイギリス行、つまり欧羅巴の国々を通過する。今あそこは、金融関係で揉めている最中だ。

(マルセイユの一の舞は踏みたかないで……)

加えてイスラム関係の動きも不穏。

今この国際便の中で自分以外の誰かが発砲した。どこの組織なのか人数・装備は不明だが、よくない状況だ。

(制圧するか？ でも人質はおんのか？)

いくつかの疑問が頭の中を駆け巡る。

本部に連絡してイギリスの特殊部隊『SAS』に動いてもらひうか？ それも良い、が武装した自分たちも危ない。

その時機内の放送機器にスイッチが入った。

「attention pleaseでやがります」

継ぎはぎの音声、どこかで聞いたことがある。

「当機はハイジャックされ やがりました。  
乗客は おとなしくしてやがれ です」

少し荒立つ言い方だ。

「なお 武偵は 例外で やがります。

相手して欲しければ 一階のバーに きやがれです」

頭の中で機内の地図を思い出して 一階へ向かう。

「ヴェスパ3より本部へ、応答願う」

「こちら本部。ヴェスパ3、どうした?」

「今搭乗中の機体が乗っ取られた。

そちらの指示と乗客の中に武偵が居るか調べてほしい」

「了解、少し待て」

ハイジャック犯は『武偵』を指名した。

もし自分の事なら相手をすればいい、他の人間なら本部の指示を待つ。

「出ました。神崎という苗字の武偵が一人乗りこんでいます」

中尉の声ではなく通信士の声だった。

「ヴェスパ3、状況はどうなっている?」

事の成り行きを要点だけを抜き出して答える。

幾つかの質問のやり取りが完了して、行動が決まる。

「何がともあれ機体を奪還しなければならない。

狙いが『神崎』武偵なら、お前に注意は向いてないはずだ。  
射殺して構わない、必ず制圧しろ」

「了解、交信終了」

階段を下りて一階にあるバーの入り口までたどり着く。

耳を立てて中の様子を窺う、一人、二人……三人。足音からしてそうだ、そして撃ちあつてている。絶え間ない銃声が室内から響く。

(あかん、すでに始まつてもた)

舌打ちして突入のタイミングを見計らう。下手に入つて流れ弾を被るのは避けたい。

中で誰かが高笑いをしている。

「あははは！ 勝てる！ 勝てるよー 理子は今日、理子になれ  
るー。」

何だ？ 何のことだ？

「きやはは！ 狹い飛行機の中、何処へ行くつていうのー？」

誰かが反対側へ走り去つていく音が聞こえる。

「鬼！」この時間かなあ？ ちょっとだけ待つてあげよっかー？」

その声の様子から判断できる、この部屋の中にいるのが敵だと。フラッシュ・バンの安全ピンを抜き、部屋の中に投げ入れた。爆音と閃光が部屋中に響き渡る。

相手のぐぐもつた悲鳴を聞いて位置を特定し、突入。

つづくまり目を抑える相手の腕をねじ上げて行動不能にする。

「抵抗するな。所属と、部隊規模を言え」

低く押し殺した声で脅す。  
捕まえたのは小さい女だった。

## 機内での攻防

捕まえた相手を見て少し驚く。  
着ている服は少し形は違うが、武偵校の物だった。

「何故武偵が？」

何処かで見たことのある顔だ。

そう、確か始業式でアリアとキンジに茶菓を入れた女の子。

「確かに峰とかいう奴やつたな？ こんな所で何してんねん？」

相手をしつかり押さえつつ、問う。

「くつふつふ、その声はコウだね～？」

「黙れ。お前の他の仲間は何処にいる？ そして、何故ハイジャックをした？」

相手の嘲笑を無視して、肩の関節を外そとと腕に力をかける。

「甘いよつ

「！？」

不意に彼女の髪が動いて、こちらを弾き飛ばした。  
想像以上の力で、壁まで吹っ飛ばされる。

不意打ちだったが何とか銃は手放さないで済んだ。  
素早く立ち上がり、カウンターの後ろに飛び込む。

「なるほど、『ウの姿は武偵の服じゃないよね』。  
どういつ事なのが理子りんに教えてくれないかな？」

「お前の墓前で教えてやる」

カウンターから身を出して銃口を頭へ向ける。

そのまま引金を引くが、飛行機がいきなり揺れて銃弾が逸れた。

「武偵法の条を破る気なのかな？」

「もとより守る気はあらへん」

余裕気につぶやく理子に再び銃口を向ける。

「ふーん。私はそのコートを着ている人たちの噂を聞いたことが  
あるよ」

「ほひ」

髪の毛をつねらせながら、さも楽しげに笑う。

「確か、特務中隊と言つてたつけ？ 私の知り合いも結構やられ  
ちゃつたんだよね」

「じきにお前もその一人になるわ」

「でも、私だけに構つてていののかな？」

「どうこつ事や？」

引金を引こうとした時、無線インカムに緊迫したライカの声が割  
つて入ってきた。

「康介さん！ 部屋まで戻ってきてください！ 新手が

「

いきなり交信が途絶える。

「どうしたヴェスペラ？ 応答を」

「ノン、ノン、よそ見はダメだよ。」

無線通信に気を取られた一瞬に銃をこちらに向けた理子が言った。  
そのまま発砲してくる。

カウンターの後ろに隠れてやり過ごすが、部屋の外に逃げられた。

(どちらに行けば？)

おそらく理子が向かつたのは遠山とアリアの方だ。  
こちらはライカが危機に陥っている。

(遠山、アリア、任せたで……)

そう心で念じて、来た道を急いで戻る。

部屋まで戻ると扉は開け放れており、腹部に刃の刺さった少女と、  
拳銃を構えるライカ

そして、あの紅い髪の女がいた。

「伏せろライカ！」

部屋の入り口に立つ自分と相手を挟んで対称点に立つライカに叫ぶ。

ライカが伏せたのと同時に両手で保持した短機関銃が火を噴く。  
左肩に数発あたり、相手が倒れる。

狙いを頭に定めて撃とうとした時、また飛行機が揺れた。

「ちつ、なんでこいつもー。」

紅い髪の少女は立ち上がりこちらに走って来る。  
同時にナイフも飛んで来た。

「一度も同じ手は喰らうか！」

わずかに身をかがめるだけで、それを回避する。

（速い！）

この一瞬で相手は目の前まで迫っていた。

銃を鈍器にして叩き下ろす。

鈍い音と共に紅い髪の少女の動きが止まる。

首の近くを、グリップ下部を思い切り叩きつけた。  
普通の人ならその場で倒れているはずだが、少女は立っている。  
だが、気絶しているのか目の焦点が合っていない。

「負けられないっ！」

歯を食いしばりながら、一いちらの腕を両方とも掴んで持ち上げる。  
信じられない力だ。

「う、う、うくー。」

力を振り絞るが敵わない。

振りほどこうとした時、腹部に衝撃が走る。

至近距離での猛烈な蹴りだった。

俺を蹴飛ばした少女はそのまま、部屋を飛び出して何処かへ走り去った。

「逃がすか！」

蹴り飛ばされたときに短機関銃は何処かに弾き飛ばされた。拾う時間ももどかしく、拳銃をホルスターから取り出して後を追う。

少女の蹴りは相当の力があり、足がふらつき目が少し眩む。それでも何とか、飛行機の搭乗口にいる少女に追いつくことができた。

背中に落下傘の入ったバックも背負っている。

左腕は動かないのか垂れ下がっている。

相手を行動不能にするため、右肩を狙つて銃を放つが外れた。

銃声に気付いた少女がこちらに向かつて突進してくる。

更に発砲して一発が太腿に当たるが、構わず向かつて迫る。

発砲させないため、少女は康介の右手の銃をスライドオープン状態に掴みあげた。

両者そのまま膠着状態になる。

「邪魔をしないで！」

「銃を持つて暴れる限り、俺はお前を倒さなかん」

「あなたは何故戦う？ 理由も無いのに私を邪魔しないで…」

「そういうお前は何のために戦う？」

「私は守るべき者のために戦つ……。」

叫びながら俺を突き飛ばして、扉を開けて機外へ少女は飛び出した。

スライド式のドアはすぐに閉じて、後を追つことは不可能だった。

突き飛ばされたとき、床に叩きつけられたせいか、妙に頭が痛い。よろける体を何とか立ち上げたとき、激しい衝撃が機体を揺さぶった。

## 機内での攻防（後書き）

すいません、出来がとてもいまいちです。  
次回はもっと、綺麗な文にしたいと思います。

## 伊・ヒ の贈り物

飛行機の高度がどんどん下がっているのが分かる。

「ヴェスパ7からヴェスパ3へ、先ほどの少女は？」

無線が回復したのか、ライカから通信に入る。

「こちらヴェスパ3、機外に逃げられた。そちらの状況は？」  
「私は平氣です。救助したボリクという少女は刃物による傷を負っています」

「程度はどのくらいだ？」

「傷は浅く、今は布で止血しています」

少女が死ぬ心配はなさそうだ。

「分かった、俺は今から操縦室へ向かう」

「了解です」

通信を終了して、操縦室へ向かう。

遠山とアリアが理子を倒したかどうかわからない。

だが、高度が下がる飛行機を持ち上げる必要もある。

扉を開けて操縦室に入ると、先に一人の人間が座っていた。

「コウ？ どうしたのその恰好？」

康介の黒いトレーンチコート姿を見たアリアが驚く。

「説明は後である。それより理子はどうした?」

「外に逃げられた。それよりも良くない状況だ、内側一つのエンジンをやられた」

いつももまして冷静なキンジが静かに言った。

「爆発物が積んでいたのか?」

「いや、ミサイルだ」

「ミサイル?」

「伊・じからの贈り物だそうだ」

「伊・じ?」

「それこそ後で説明する」

そこで疑問に思つ。

もし本当にミサイルなら、翼が吹つ飛んで今頃自分たちはお陀仏のはず……

爆薬を抜いてあつた物なのか?

それともあるいは不発だつたのか?

そこに、遠山の持つ無線機に通信が入る。

「ANA6000便、いきはま航空自衛隊、中部航空方面隊司令

部だ

無線機から野太い声が聞こえた。

「羽田滑走路は現在トラブルにより使用不能。

誘導機に従い、太平洋上に進路をとれ」

「シグネットの窓の外に一機の戦闘機が現れた。遠山と無線の相手が口論している間に、室外に出る。そして、本部に通信回線をつなげた。

「こちらヴァスパ3、本部へ応答を願う」

ニセラ本語 宮ノハラ三郎源を知らせ

いつにもまして緊迫した声で天田中尉が言葉を発する。

「ハイジャック犯は撃退した。

「何機だ?」

「確認しただけで一機」「機種は?」

「たぶん二~五だと思ひが」  
「そ、うか……」

何か含みのある言い方だ。

「今、少し悪い情報が入つてな。

領空侵犯の飛行機が一機太平洋側から日本へ入ってきたらしい。同時にその空域にいる旅客機が制御不能に陥り、その期待にマサイルが命中した。

事態を重く見た自衛隊は、領空侵犯機の撃墜を決定。

第七航空団の百里基地から五機のF-15戦闘機、RF-4偵察機が

二機が出撃した

中尉の情報を聞いて手に汗が浮かんだ。

「じゃあ、この旅客機のそばにいる戦闘機は？」

嫌な予感がして、心臓の鼓動が速くなる。

「自衛隊の航空機でない可能性が高い」

最悪の言葉だった。

## 空を駆けて

「Jの旅客機を誘導しようとした戦闘機は敵。  
先程から話題に上がっていた『伊・J』に関係があるかもしれません  
い。」

「ヴェスパ3から本部へ、何とか外の機体を追い払う方法は？」

その時、本部との通信に一本の回線が加わった。

「やはー、ヴェスパ3、元気してる？」

場の空氣にそぐわない、朗らかな声だった。

「ヴェスパ2、今俺が大丈夫なように思えるか？」

「JめんJめん。

と、その話はさておき、要はその纏わり付いてる奴を追い払えばいいんだよね？」

自信ありげな声が無線から聞こえる。

「それは、そうなんだが……あんた、今どこだ？」

「もち、空を飛んでるよ」

そういうえば、ヴェスパ2も何か用事があつて東京に来ていた事を  
思い出す。

確か、新型戦闘機の受け取りか何とか

「ヴェスパ2、今戦闘機に乗ってるか？」

「よく分かつたね、その通りだよ。

ちなみに後、一分ほどで有視界距離に入るよ

安堵にも似た感覚を覚える。

ヴェスパ2は性格こそ問題があるが、操縦士としての腕は一流だ。新型の戦闘機に乗っているならば、F15に負けることは無いだる。

「よかつた、所属不明機の撃墜を頼む」

航空自衛隊の到着まであと数分は掛かるだろう。それよりもヴェスパ2の到着の方が速い。これで何とかなる、そう思った。

「ああ、撃墜は無理だよ  
「えつー?」

あつさつと拒否された。

「何故だ?」

「私の乗ってる戦闘機、武器が無いもん」

聞けば、受領した『心神』はステルス性能やエンジン性能の実験型らしい。

武装は全く無いらしい。

「じゃあ、どうする気だ?」

先程の自信ありげな主張を再確認するよつと問いつ。

「撃墜は無理でも、旅客機から引かれ離すことは出来ぬよ」

「武器もないのにか？」

「まあ、コックピットから見てよ」

通信が途切れ、本部とも更新を終了して操縦室に戻る。

「あんた、こんな時に何してたの……」

最初に飛んできたのはアリアの怒声だった。

「すまんちよつと機内の確認をしてきた」

適当な言い訳をしてしまかす。

「遠山、この機は今どこへ向かっている？」  
「東京へ戻るルートだ」

遠山の落ち着いた、声が返つてくれる。

「やつたら、そのまま羽田に向かってくれ」

操縦席に座る一人が驚いた顔をする。

「今羽田の滑走路は使えないって言つてたじやない  
「あれは嘘のはずだ」

そこに、操縦席の通信機に新たな無線が入る。

「誰だ？」 ひらひらの指示に従い太平洋上に進路をとれ

わざほど、中部航空方面隊司令部を名乗った男の声だった。

「俺は豊和だ。」

貴官に問ひ、どの基地に所属の機体が誘導機として来ている?」

「……」

すぐには返答が無い。

「小松基地所属の機体だ」

少しの間をおいてからの返答、その答えは嘘の物だった。  
相手には聞こえない小声でアリアとキンジに話しかける。

「無線の相手は嘘をついたる、外の機体も自衛隊の物やあらへん  
「だがそれが分かつても、どうしようもないぞ?」

遠山が外の機体を横目で見た。

「それは……」

口を開けかけたとき、こちらに向かってくる黒い影が見えた。  
現れたその影は、外にいる戦闘機の真下を通過しする。

突然の事に、この旅客機を見張っていた戦闘機は大きく旋回して  
いく。

その影は、ヴェスパ<sup>2</sup>が乗る心神だった。

「何だあの機体は? まさかF-X?」

遠山が驚いたように呟つ。

「それよりも見て！ 一機ともあの機体を追ったわよ」

もう片方の所属不明機も心神を追つて、機体を大きく右に旋回させた。

今、この旅客機は安全な状態になった。

「今のうちに進路を羽田に」

「分かったわ」

アリアが操縦桿を動かしていく。  
進路が羽田空港に向けられる。

「でも……」

アリアが不安げに口を開く。

「着陸なんてできるの？」

「難しいが、この機体は運がいい。」

燃料が漏れているおかげで機体も軽くなつとる。

後は神のみぞ知る、や」

最後の問題はどう着陸させるか、だ。

アリアは小型機を操縦できるそうだが、自分たちは専門外だ。

一人の少女に全てを委ねて固唾をのむ。

「待て、あれは何だ？」

前方を見ていた遠山が目を細める。

その何かは、雲の隙間から姿を現した。

一機のエンジンを最大限に稼働させ、真上を通過していくF-15。その垂直尾翼には鷲の部隊マーク。

「第204飛行隊や！」

後方で格闘する所屬不明機に殺到していく、五つの銀翼。新たな通信が入った。

「600便、応答を」

窓の外には、RF-4偵察機が並んで飛んでいた。そのパイロットからの通信だった。

「今から、そちらをエスコートします」

その操縦士から誘導を受け、操縦桿を動かしていくアリア。その数分後に、旅客機は羽田の滑走路に舞い降りた。自分たちを助けてくれた飛行隊から最後の通信が入る。

『勇敢な武偵諸君へ賞賛を送る』

隊列を組んで戻ってきた五機の戦闘機。東京の上空で、見事な編隊宙返りを見させてくれた。

月が登り始めた頃、薄明りの星空を眺めながら溜め息をつく。  
「こは男子寮の自室、そのベランダ。

「何でお前は武僧になつたんや?」

遠くを眺めている、遠山の方に向ぐ。

「家が、そういう家系だつたのさ。正義の味方の家系だ」「正義……ね」

再び夜空を見上げて咳く。

「そ、うお前は、いつたい何者なんだ?」

首だけ動かして、一いちを向ぐ遠山。

「察してんねやろ?」

「まあだいたい、お前も正義の組織が何かか?」

「教える氣はあらへん」

「そつか」

遠山もあまり深くまでは追及してこなかつた。  
自分の手のひらを見ながら考える。

『正義』それは、綺麗な言葉だらう。

その言葉で、戦うことができた人は大勢いる。

だが、その言葉を使って多くの人が殺人鬼になった。言葉の力で戦争が起きた事は、いくらでもある。

二人の間に誰かが割って入ってきた。

「綺麗な夜空ね」

少し元気の無さそうな声で呟いたのはアリアだった。

「せやな」

続ける言葉を見つけることができない。

遠山もなんと声をかけようか迷っている様子だ。

「ママの公判が延びたわ」

アリアが視線を一度下に落とす。

「今回の件で『武偵殺し』が冤罪って証明できたから……弁護士の話では、最高裁が年単位で延期になるんだって」

「そうか」

良かつたな、といつ雰囲気でもなく、遠山が短く返した。

「ねえキンジ、あんた何である飛行機まで、助けに来てくれたの？」

「ウは何である飛行機の中にいたの？」

「……ごめん、答えられん」

話すことには出来ない、謝罪の言葉を述べてその意を示す。

対して遠山は、どう言葉にするか悩んでいるみたいだ。

「……まあ、バカのお前じや、『武偵殺し』に勝てないと思ったからだよ」

「あ、あのくらい、あたし一人でなんとかできた。バカはそっちよ」

普通なら、自分の事を馬鹿にした遠山に何かしらの攻撃を仕掛けるのだが……

今日のアリアは妙に大人しかった。

「『』めん、今の嘘」

やや間を置いてから、アリアが口を開く。

「どれが嘘だ」

遠山が深い溜め息をついた。

「私一人じゃ……どうにも出来なかつた」

いつも自信満々、独断専行のアリアにしては珍しい台詞だった。

「あの空で分かつたの、何でパートナーが必要なのかって。一人じゃ解決できないことがあるって、知つたの」

今この少女が言つた事は、前のような一方的なものでなかつた。真剣に背中を預けれる人を探している。

「だから、お別れを言いに来たの」

「お別れ？」

遠山が少し驚いたよつと書ひ。

「なんでや?..」

驚いたのは自分も一緒だった。

「キンジは一回だけ事件に付き合つてもひつ約束だった。  
「ウも、私がパートナーを奴隸の様に思つていていた頃に約束した。  
だから、もういいの」

返す言葉が浮かばない。

「もう一人を追わないわ。  
だから……でも、もしも、気が変わったなら」

やはり、諦めることがそう簡単にできないみたいだ。

「……悪い」

田を逸らしつつ、遠山が謝つた。

「そり……今までありがと」

それだけ呟いて、アリアは黙り込んだ。  
気まずい時間が流れしていく。

ふと時計を見たアリアが呟く。

「もうこんな時間……」

「約束でもあるのか？」

「お迎えが来るのよ。ロンドン武僧局に戻るの」

アリアが昔活動していた場所、そこに戻るらしい。

「今までありがとうございました」

それだけ言って、アリアはベランダを去った。

## 空からの落とし物

アリアが去つて行き、妙な静けさに包まれる。遠山も部屋に戻つていった。

「戦う理由……か」

あの旅客機の中では少女に聞かれた。  
お前の戦う理由は何だ？  
と。

その少女は言った。

自分には守る者がいる。  
だから、邪魔をするな。

今、自分は悩んでいる。  
何のために戦うか

考えても分からぬ。

自分は今まで任務を全うしてきた。

沢山の人を殺した。

けれど、同じくらいの人も助けた。

そもそも自分達が武偵として行動するのも偽り。  
偵察任務に近いものだ。

だからこそ、彼女を助ける義理は無いはず。  
悩む必要も無いはず。

(「のまま、まつとねば良いやう）

全部忘れてしまえばいい。  
そう考えた。

「私には時間が無いの…」

不意にアリアの顔が浮かんだ。  
自分の母が冤罪で捕えられている。  
その冤罪を証明するために、必死で頑張っていた。  
そこまで思い出した時、もう悩むことは無い。

窓を開けて部屋の中に戻ると、遠山は一通の書類を手にしていた。  
そして、それを一枚に引き裂いた。

「何の紙やつたん？」  
「武徳高からの転出届」  
「そないか」  
「ああ」

その後、言葉は必要なかつた。  
扉をけ破つて、全力で走る。

「へりが来るしたら何処やーー？」  
「女子寮の上だ！」

田の前に現れる障害はすべて薙ぎ倒し飛び越えて、屋上を田指す。  
最上階の扉を体当たりで無理やり開ける。

わずかに遅かった。

ヘリは離陸していた。

「アリア！ 戻つて来い！！ アリアアアア！！！」

それでも構わず、一人で叫ぶ。

(やつぱ、手遅れか？)

そんな疑問が宿つた時だつた。

ヘリのドアが開き、一人の少女が落ちてくる。

「一人とも遅いのよー！」

闇夜を背景にアリアが降下していく。

「キンジ、キャッチしろ、俺が下敷きになるーー。」

「頼むぞ」

キンジの後ろへ回り込む。

「ちやんと受け止めなさいよー！」

全てをこじらせて託して落す。

遠矢が受け止め後ろに倒れてくる。

その下にヘッドスライディングの要領で滑り込む。

そして、背中に重たい物が落ちてきた。

「みんな生きとるか?」

「当たり前よー」 「もちろんだ

ふと上を見上げると、へりから数人の人間がおりてくるのが見えた。

「逃げるぞ！」

いち早く動いたのはキンジだった。

階段で降りていっては間に合わない。  
だとしたら、残る脱出経路はあと一つ。  
屋上から飛び降りる事だけだ。

そんな雄叫びと共に温室のビールハウスに突っ込んだ。

本当に遼やか？

女子寮の屋上から飛び降りて、ロンドンからの役人を撤いて、自室。

「えらい無茶したもんやな」

「屋上から飛び降りるなんて、どんな神経してるのよ」

「それしかなかつた、仕方ないだろ」

それでも全員が笑つてゐるのは、いい事なのだらう。

「とにかく

アリアが何かを言いかけた時、遠山の携帯が着信音を鳴らした。

「悪い」

画面を開けて、文字を読む遠山。

その顔が次第に青ざめていく。

手が尋常じやないくらい震えていた。

「ちよ、ぢないしてん？」

「に、ににに、逃げ

」

直後に何かが斬られた音がした。

「何が起きたの？」

それはすぐに姿を現した。

刀を抱えた巫女装束姿の少女。

確かに一度見たことがある、白雪とか言つ名前だつたはず。三人の姿を見渡して、一人の人間に目が止まる。

「やつぱりいた！ 神崎・H・アリア！」

そう叫ぶなりいきなり日本刀を持ち上げる。

「天誅うう！」

叫びつつ斬り下す。

アリアはそれを両の手で受け止めた。  
俗に言つ、真剣白刃取りだ。

「一体なんなのよ！」

距離を取つてガバメントを取り出すアリア。  
仲裁を求めるために遠山を探したが彼は既に居なかつた。

じりじりとタイミングを計る一人。

その数秒後には、激しい戦いが繰り広げられた。

体に新しい穴が開く前になんとか玄関を脱出した。  
今日はあの部屋に帰れる気がしない。

「で、康介さんはここに来たのですか？」

「はい」

ここは女子寮の一室、ライカの部屋だ。

「うりゅ、私は構いませんよ。

ルチアさんが居なくなつて私も寂しかつたですし

「助かる」

キッチンに立つてゐるライカ、何か作つてゐるみたいだ。

「もうすぐ、お料理ができます。食べますか?」

「おう、何を作つてんの?」

「んと、ぼるしちです」

ボルシチ、ロシア語でいうスープみたいな物。

まだ、料理を食べていらない康介はテーブルに座つてゐる。

「できました」

火を消して、鍋を抱えて持つてくる。

その後、パンやチーズなどを取り出して並べていく。

高い所にある皿などは出すのを手伝つ。

「おいしい」

出来立てのスープを口に含んだとき、自然にそんな言葉が出た。

「うりゅ、うれしいです」

結局その日は、ライカの部屋に泊まることになった。

## ぬぐもつ

「ルチアの時もか?」

「うりゅ、もちろんです」

「出来れば退いてくれんか?」

「うりゅう、寂しいんです。ダメですか?」

ぐるりと反転してこちらを上田遣いで覗くライカ。  
その顔は目と鼻の先、すぐ傍にある。

「俺の性別分かつてる?」

「うりゅ? ハウせんなら安心できます」

今、二人は同じ布団で寝ている。

夕食を食べ終わり、最近起きたことを話していくと時間は過ぎ。  
そろそろ寝ようと康介が提案したところ、ライカは一緒に寝たい  
と言い出した。

ライカの時も同じようにして寝ていたらしい。

あの、大らかなルチアなら断ることは無いであろう。

だがしかし、康介は男。

いくらライカが子供っぽいとはいえ、一人の女性であることに変  
わりはない。

「あの、ホンマに……」

「ぐ~す~び~」

そのまま寝入ってしまった。

「起きる、とつあえず起きる」

ゆすりても起きない、気持ちよさそうに寝ている。

カーテンの合間から漏れた月明かりが畳麻色の髪を照らした。

真っ直ぐ綺麗で、なめらかな髪の毛だ。

痛んでいる所もはねている所も無く、薄つすらと百合の花の匂いがした。

(やつま、女の子はちやうな)

自分のぼさぼさな髪の毛。

シャンプーで適当に洗い流し、タオルで乱暴に拭く。リンスなんてしたことも無い、櫛で梳かすこともしない。

それと比べるとライカの髪の毛はとても美しく見えた。

無意識のうちにライカの頭を撫でていた。  
起きるかと思ったがそんなことは無く。  
ライカは気持ちよさそうだった。

(なんか、犬みたいな奴やな)

鼻をくすぐる甘い香りと眠気に誘われ、次第に目蓋が下がつてくれる。

その日は久しぶりに心地よく眠れた。

## 意外な一面

次の日、自室に帰った康介は床に突っ伏していた。

「何や！？ 何があつてん！？ 何があつたらこいつなんねん！？」

一昨日までは普通の、テレビやテーブル、本棚、食器棚のある文  
明の形がはつきりあつた。

だが今はどうだらう、部屋のあちこちに穴や切り裂かれた跡があ  
る。

家具は「ことじ」とく破壊されていた。

「朝からつるむせこわね」

玄関口から聞こえた大声に目を覚ましたアリアが寝室から出でき  
た。  
後ろからキンジも眠そうな顔を出す。

「！」にあつたはずのテレビは？ テーブルは！？ 僕の本棚は  
！？」

部屋を見渡すキンジ。

「あれ、じゃないか？」

そこには無残に破壊された本棚の姿があつた。

今まで自分が集めてきた世界中の城に関する本が変わり果てた姿  
になつている。

「おおおおおおおおおおおおおお……」

康介が頭を抱えて絶叫する。

「うるさい……」

アリアの回し蹴りが顔面に炸裂する。

「お前だろ……」の部屋をここまで壊したのは?  
「あたしじゃない白雪よ……」  
「昨日、暴れとったやろ……」  
「だから、あたしじゃない！　白雪がやつたって言つてんでしょう！」

その後どれだけ言つても聞き入られることは無かつた。  
さしもの康介も口論に疲れたのか、アリアに何かを言つのをやめると

「結構苦労したのに……」

それだけ呟いて、康介はフラフラと本の残骸へ歩み寄る。  
そのまま三角座りになつて動かなくなつた。

その様子ははつきり言つて暗い。  
まるで何かに病んでいる様だ。

(ちよと、口はばぢつたの?)

異様な光景に少し引き気味のアリアがキンジに小声で尋ねる  
(自分大切な物が無残な姿になつたから、だと思つが)

二人そろって康介の方を向く。

(何かヤバそうね……)

(ああ、ヤバそうだな)

なんと声をかけるべきかと悩んでいると、康介は立ち上がった。目の焦点が合っておらず、足取りも怪しい。

「あの、コウ、私も悪かったと思つの、その……」

さすがに罪悪感を感じたのか、アリアが謝ろうとする。そんなアリアの言葉に耳を貸さず、玄関で靴を履き外へ出していく康介。

ふと時計を見た遠山がその後ろ姿に向かつて叫ぶ。

「コウー、学校は！？ ちょ、おい、どこに行くんだ！？」

そのまま康介は何処かへ消えた。

### 学校の昼休み

「つりや？ 遠山さん、康介さんを知りませんか？」

朝から姿を見せない康介を不思議に思つたライカが遠山に尋ねる。学校の用意があるからと、ライカの部屋を朝早くに出て行つた。そして、また顔を合わせるはずの教室にいない。

「その…… ビニがへ行つた」

キンジ自身も康介が何処に行つたのか知らないので、曖昧な返事しか返せない。

「うりゅう、 そうですか……

あの後、 一体ビニへ行つたのでしょうか？」

その言葉にアリアが食いつく。

「え、 あの後つてビニのこと？」

「うりゅ？ 私の部屋から帰つて行つたときです」

その言葉を聞いたキンジとアリアがぎょっとする。

「ライカの部屋を出たつて、 朝の事か？」

「うりゅ、 今日の朝早くに私の部屋を出て行かれました」

「昨日、 ハウは部屋に帰つてこなかつたのだが……」

「うりゅ？ ハウさんは私の部屋にいましたよ」

洗いざらつて昨日の夜の事を話すライカ。

「もしかして、 昨日ハウはライカの部屋に泊つたのか？」

少し声のトーンを落としてキンジが尋ねる。

「うりゅ、 一緒のお布団で寝ました」

康介にあらぬ疑惑がかけられた瞬間であった。

その会話を、武藤、不知火、理子はしつかり聞いていた。

時は少し前のこと

自分の大切な書物を失い、康介は文字通り幽霊のように街を徘徊していく。

その足が自然に向かつたのは、本屋。

「合計5万3・〇25円になります」

「カードで」

一枚のカードを取り出して店員に渡す康介。  
レジに出されたカゴには大小様々な本が一杯に入っていた。

大きな紙袋三つに詰められていく、本を抱えてまた別のところへ歩いていく。

その後、夕暮れ時まで本屋、中古本屋を巡った康介は午後四時に帰宅した。

「コウ、何処にいたんだ？ つてなんだその大荷物は！？」

キンジが目にしたのは、左右の手に各五袋ずつ紙袋を持つ康介の姿だった。

軽く見積もつても百冊近くの本はありそうだ。

その背中には、組み立て式のアルミ製本棚キットが顔を出している。

「お前、まさか本を買ってたのか！？」

る。

康介は何も言わず、寮の各部屋に四つある小さな私室に入つてい  
く。

「ちょっと、何があったの？ 開けなさいよ！」

扉を閉じてから一步も部屋を出でこない康介を引きずりだそうと  
アリアがドア越しに怒鳴る。

だが、買った本は一度読んでから本棚に入れる康介。  
次の日の朝まで姿を見せることは無かつた。

## 意外な一面（後書き）

完全にギャグ回です。

自室が半壊状態になつてから数日。康介は再びライカの部屋にいた。

だが今回はライカに呼ばれて来ている。どうやら新しい銃が届いたようだ。

「うりゅ、どうですかコウさん？ 私専用の銃なんです」

黒いケースから取り出されたのは、一丁の拳銃。CZ75SP1が一丁だった。

ライカの愛銃CZ75のフルサイズモデルでマウントレールを装備している。

銃剣を付けることが可能な拳銃である。

一つは通常の黒色だが、もう一つは藍色に彩られていた。

「何で二丁も？」

「もつてみてください、そつすればわかりますよ」

藍色の銃が渡される。

グリップを握るが特に変わった感触は無い。

「？」

右手の親指を動かして気が付く。

マガジンリースやセーフティが銃の左側ではなく右側について

いる。

排莢口も通常とは反対の左側に設けられていた。

簡単に言つと、左右の構造が普通の拳銃と反対なのだ。

「なんだこりや

怪訝に思ひながらも銃をライカに返す。

「うりゅ、どうですか？　一丁拳銃です」

黒の銃を右手に、藍の銃を左手に構えるライカ。  
マガジンポーチと一体型のホルスターを両太ももに装着するライ  
カ。

両手を腹部の前方で交差させて銃を抜いたり収めたりと確認動作  
を行ひ。

マガジンポーチは太腿に対しても斜めに取り付けられる形になつて  
いる。

おそらく片手で再装填できるよう工夫された物だらう。

他にも一丁SR2“ベレスク”短機関銃がケースの中に入つて  
いた。

9×21ミリの弾薬を使う貫通性に優れたサブマシンガンだ。

「何で新しい銃なんて今頃に？」

「うりゅ、この前のハイジャック事件で破損してしまったんです

「ああ、あの紅尻尾あかじつぽの奴にやられたときか」

「うりゅ、そうです

たびたび姿を現す謎の敵、紅い髪の少女を便宜上『紅尻尾』と中隊で読んでいる。

その少女とライカは一度戦い、ライカの敗北で終わっている。

康介自身も一度戦つたが、倒すことができず傷を負うことがあった。

武装はそこまで重装備ではない、トカレフとナイフが主だった、武器やる?」

「ヒーヒー何でヒクシリーズやねん? お前は確かロシア系統の

ふと今までのライカの装備を思い出して聞いてみる。

どれも、ロシアの武器を使っていたのに、拳銃だけチェコ製だ。

東側諸国作った銃だから関係性が無いとはい、少し不自然だった。

そもそもチエコ製の銃はルチアの専門だ。

「うりや? それはその、少し事情がありまして……

「事情?」

ライカの説明だとこういう事になる。

ハイジャック事件にて愛用の拳銃と短機関銃を損失、新たな銃を申請した時にルチアと相談した。

内容はこうだ。

康介の持つ愛称、使用する銃器から付けられた『<sup>スペクトラ</sup>亡靈』の名に憧れた。

『亡靈』みたいにカッコイイ名を持つ銃は無いかとルチアに尋ねた。

た。

するとルチアはCZ75シリーズの一つ『影』の名を冠する銃を教えた。

それがCZ75SP1だった。

さりに前々からルチアが持つてはいたが使わなかつた左利き用の型も送つてきたりしい。

それが、あの藍色のCZ75SP1らしい。

ルチア曰く「左手で拳銃は撃つ機会は無い」と、零中隊専属の銃技師兼銃鍛冶である木山軍曹の手作りのSP1を返却した。

使用者が居らず、倉庫に眠つていたのをライカが譲り受けたとう事になる。

「てことはお前の愛称は『影』とか『夕闇』か？」  
「うりゅ、『幽靈』だそうです」  
「それやと俺と一緒にないか」  
「いえ、厳密に辞書で調べると少し違いますよ」

ライカが言つに至る。

幽靈は、実際には無い物が有るよう見える」と。  
亡靈は、その復活を恐れられる、今は滅びた過去の物のこと。

といひ事らしい。

だが、辞書のどちらにも『死者の魂』と記載されていた。

ライカの言つたことは、その下の第一・第二の意味である。

「ま、お前が好きなんやつたらそれでええと思つけど」

「うりゅ、とても気に入っています」

そんな折であつた、中隊専用のノートパソコンに一通のメールが届いた。

暗号化された文書は、自分たち一人に対する指令書だつた。

## 夕凪に漂つ血の匂い

夕方の七時を過ぎた頃。康介とライカは有明四丁目、コンテナの立ち並ぶ港に向かっていた。

今回の任務は中国経由で来た密輸員の殲滅、密輸船の撃沈もしくは奪取。

密輸物資は阿片や大麻などの麻薬物質だそうだ。

「敵は特殊部隊では無いが油断するなよ？」

「はい」

コンテナを背にしながら物陰から物陰へと移動していく。康介は手にはSpecter短機関銃、ライカは両手にCZ75 SP1を握っている。

本当はSR2を持ってきて欲しかったが、今回は比較的簡単なので何も言わなかつた。

目標地点まで数十メートルと近づいてきた。

夕凪のせいか辺りに風は無く、暗闇と静寂が体を包んでいた。

その時、鼻をかすめる濃い匂いがした。  
人の血の匂い。

「ヴェスパー、止まれ」

「？」

コンテナとコンテナの間に銃を握った人が倒れていた。体のあちこちに銃で撃たれたような跡がある。

もがき苦しんだのか、付近の地面やコンテナに大量の血が塗りつけられていた。

死因は出血死、どの傷も急所にはない。

道の先に、血の足跡が続いている。

撃つた人間を踏みつけてからこの場を去つたのだろうか。

「ヴェスパ③から本部へ、作戦地点にて銃撃戦の跡を発見。他に作戦中のヴェスパ、並びに別勢力の情報は？」

「こちら本部、現在有明で行動中のヴェスパは③と⑦のみ。自衛隊、警察も行動を確認していない」

「ヴェスパ③と⑦はこのまま戦闘行動に入ります」

「承認する。正体不明の敵も排除して構わない」

「了解」

銃を構えつつ慎重に移動していく。

「またや」

「コンテナの角を曲がるとすぐそこにまた同じような姿態があつた。やはり苦しんで暴れた跡がある、銃弾は全て一撃で死なない場所を貫いている。

次に見つけた死体は、四肢をもぎ取られていた。複数回にわたって殴打された後もある。

間違いない、獵奇的な人間の殺し方だ。

それも手練れだ、相手にほとんど抵抗されていない。

「コウさん……」

「作戦中はコールサインを使え。あまり死体は見るな」

残酷な手口で殺された屍を見たライカは青ざめている。  
康介自身も気分が悪そうだ。

(氣味が悪いわ)

コンテナを抜けると一隻の小型船が港に接舷していた。  
そこに数回マズルフラッシュが光る。

コンテナの陰から様子を窺う。

しばらくすると、船の中から長身の人影が現れた。

月明かりを背にしているので顔が分からぬが、その両の眼だけ  
は異様に浮き上がっている。

その眼は真っ直ぐ、こちらを捉えた。

## 狂った猛獸

あれは危ない目、人が苦しむのを楽しむ目だった。  
こちらを見て、自分の姿を捉えてもなお笑っている。

「ヴェスペー、後退して背後のカバーを頼む。一対一に持ち込む  
「了解です」

ライカは後方に下がって、正体不明の敵に迂回していく。

氣味の悪い笑みを浮かべながら相手はこちらに近づいてくる。  
ゆっくりと歩いてくるのは、余裕の表れだろう。  
背は高く、黒い血の色をした髪の女だった。

コンテナに身を隠しつつ、短機関銃を向けて撃つ。

相手は素早く身をかがめて三つ放れたコンテナの陰に隠れた。

「ヴェスペー、回り込みは中止。その場で待機」

無線機にそう告げる。

だが、答えが返つてこない。

「よそ見してる場合かー？ ちゃんと前の敵も見なよーーー！」

コンテナ上から不気味な声がした。

相手はこちらに銃を向けている。

バトルライフルに分類されるM14EBRだ。

「くそつー」

「ヤツハー……」

豪快に叫びながら撃つてきた。

全力でその場を離れ、コンテナの後ろに隠れる。

だが、強力な7・62ミリ弾を使うM14は簡単に薄い鉄板を貫通した。

凶暴な銃弾が暴力的に降り注いでくる。

アサルトライフルを持って来るべきだったと悔やむ。だが、現状の武装で対応するしか無い。

相手のライフルの弱点は装弾数の低さ。

弾倉を取り換える瞬間に至近距離持ち込むしかない。

激しい銃撃が止まる、物陰に体を隠しながら覗くと相手は弾倉を取り換えている。

コンテナ上部に立つ相手に短機関銃を撃ちながら素早く近づく。

「はつ、甘いね！……」のバカが……

持つているEZRを投げつけてきた。ギリギリのところで右に飛んで避ける。

「そつちに気を取られてんじやないよ……」

「なつ……」

一メートルはある距離を、助走もつけずに飛んだ。覆いかぶさるように上から飛び抑えられ、一瞬で馬乗りにされた。

「ひやつはつは！ 強化された人間がお前達だけだと思ったか！」

康介の首を絞めながら、女が狂ったように喋りだす。

「てめえ男か！？ おもしれえ、ヴェスパに男が居たとは…」

「何……だと」

首を絞める手を掴んで引き剥がそうとするが、相手の腕は微動だにしない。

「冥土の土産に教えてやるよ、あたしはベルヴァ。

あんたらと同じで、体のあちこちいじくってできた化け物さ…」

手の力が一層強くなる。

首の骨がきしむ音がする。

「苦しみな、それがあたしの楽しみさ！ あんただって、人を殺すのが好きなんだろ！」

歯をむき出しにして笑うベルヴァと名乗る女は、化け物そのものだった。

「お前と……一緒にするな…！」

上半身と下半身を使い、反動をつけて相手を押し飛ばす。

「何が違うのさ？ 人を殺して生きてきたんだろ？ 人を殺すために生きてきたんだろ？」

伊・じは面白い所だよ、あたしに人殺しの楽しみをくれるから

ね！」

銃も持たず再び突進してくる。

素早く拳銃を抜いて、右胸と右の太腿を撃ち抜く。

「はは！　聞かないね！！」

痛みをものともせずに再びつかみ合ひの形になる。

「ライカもそうさね！　あの子も殺すための機械さ！！  
ソ連兵の生き残りは面白い事を考えるね！！　その技術があたし  
に使われたんだから！！！」

相手の左手を右手で右手を左手に掴み、力比べをする姿勢で両者  
とも固まっている。  
決して動いてないわけではない、全身の筋肉を振り絞つて押し合  
つていた。

「ライカがソ連の残党に作られた！？」

「よく知らないけどな、あたしは伊・じで作られたからねえ。  
でも、あたしを作った奴らはソ連の残党だったらしい、ゼッキー  
ベはそう言つてた」

ベルヴァアは組織をそこまで重くは見ていないようだ。

景気よく組織の情報を話していく。

「お前は何がしたいんだ！？」

「何言つてんだい、人を殺さずして何のための存在だよ？  
あたしも、あなたも似たようなもんだろ！！」

相手が至近距離からの蹴りを放つ。

掴み合っていたため、腹の中を貫通するような衝撃が直撃した。

強烈な力で数メートル程、飛ばされる。

「げほっ」

内臓のどこかに傷が入ったのか、大量の血が口から吐き出された。足まで痛みが伝わって立つことができない。

「やつぱりいいね、殺し合いは……！」

再び飛び込んでくるベルヴァアに数発の弾丸が飛来する。駆け付けたライカが撃つた弾だつた。

「ちつ、使えない奴らを雇うんじゃなかつた」

それだけ呟いて、ベルヴァアは海の中へ逃げて行つた。ライカが傍に駆け寄つてくるのが目の端に移つたが、そこで意識が途切れた。

## 狂った猛獸（後書き）

『（BELVA）ベルヴァ』イタリア語で猛獸という意味です。  
『ヴェスパ』は大雀蜂の学名『ヴェスパ・マンダリア』からです。

読んで頂きありがとうございます。

言い回しが下手な場所や、原作を活かせていない所が多くあると思います。

ほんの一言でも「拙拙」と「感想を頂けたら、嬉しいです。

## 記憶の隙間に現れて

お前は誰だ？

目の前には一人の人間が立っていた。  
いや、人の形をした『影』とでも言つた方がいいだらう。

どうして生きてきた？

口の無い顔、くぼみの無い表情。

頭の中に響く声、広い空間の中に自分は立っている。

「俺は豊和だ、人として生きてきた」

いつの間にかその影は後ろに立つていた。

人の道を外れたお前が？ 人として？

「それはっ！」

また目の前に現れる。

お前は知つてはいるはずだ、人の道を外れて人間という形で  
動いていることを

「それが悪い事なのか！？」

掴みかかるが、また消えていなくなる。

分かつてゐるんだろう？ 自分が人殺しの化け物だつてこ  
とが

「そうだが、だが、しかし……」

「やつて言い訳するのか？」

感じりよ自分の心の中の氣

持ちを

「何の事だ？」

生き物の中にある『戦つ』衝動の事だ

影が薄くなつていく。

「逃げるな！！」

必死で追いかける。

影は、どんどん遠ざかつていく。

そして、見えなくなつた。

「一体……」

後ろからの冷たい目線。

「なつ！？」

振り向いて目に入ったのは人の顔。  
自分が殺した人間の。

一つではない、いつの間にか自分の周囲には数えきれない顔が浮かんでいた。

全て自分が殺した人間の顔だ。  
それが一斉に襲つてくる。

「靈なら」  
「靈らしへ生きてこりよ

その言葉が頭に響いた。

田を開けると、いつかの時のよつて白い天井が見えた。

「つりや、口かさん田を覚ましたか？」

何故か主水先生ではなく、ライカがベッドのそばに居た。頭の中がぼんやりとしていて、うまく物事が思い出せない。

「ここは？」

「特務零中隊本部の医療施設です」

ああ、そうだった。

確かに作戦中ベルヴァアという女と交戦し、気絶したのだ。

「作戦はどうなった？」

「うりゅ、田標の中国系密輸者は、謎の敵がほとんど制圧していました。

私も複数の敵と戦いましたが撃退に成功しています。

作戦は成功しました」

制圧目標は中国人だから、それを倒しているので作戦は一応成功という事になる。

だが、どう考てもあのベルヴァアとは再び銃火を交えることになりそうだ。

「うりゅー、でも良かつたです目が覚めて」

「そんなに危なかつたのか？」

「三日間ずっと寝てたんです」

よく見ると、ライカは少し眠たそうな眼をしている。

「もしかして、ライカが看病してくれたのか？」

「うりゅ、もちろんです。

私が駆けつけるのが遅れたせいで、コウさんが怪我をしてしまったのですから」

腹部に痛みは感じない、恐らくそこまで酷い損傷ではなかつたのだろう。

眠つっていたのは頭部へのダメージが原因かも知れない。

目が覚めた直後だといつのに、ヴェスパ全員に招集がかかつた。

### 作戦会議室にて

「今から通称『伊・ヒ』と『ソ連の残党』についての収集情報を説明する」

背後に大きなスクリーンを背負つて中尉が立つている。部屋の中にはヴェスパ2、3、4、5、7が座つていた。

「まずは『伊・ヒ』についてだ。

細かい歴史を省くが本は枢軸国の共同開発機関だ。我が中隊も幾度か戦っているが厄介な相手だつた。一般の人間だけで構成されていないのが問題だ」

一般ではない人間、超能力を使う人間がいると中尉は言った。

康介も飛行機で理子と戦つたが、彼女もその一人だ。

「現在でも拠点の存在が判明しない」

誰もが予想していたのか、これといった反応は無い。

「だが、もう一つの組織『ソ連の残党』についてはいくつかの情報が集まつた」

隊員に少し驚きが生まれる。

「形態的には『伊・ロ』のソ連版だと思つてくれたらいい。異なる点はいくつかある。

彼らは『ヴェスパ』と似通つた人口強化人間を作つてゐる事。組織の構成員はロシア人と日本人の混成。

そして、拠点はおそらく関東か東北だと推測される

驚きの言葉だった、広い範囲ではあるが相手の拠点が判明しているらしい。

「これはロシア、朝鮮経由の密輸物資にある薬剤等のルートから割り出した。

そのほかにも武器の流れや

「

その後入手した様々な情報を聞いてから会議は終わつた。その夜、康介とライカは東京へと再び向かつた。

## たんじぶ

「で、朝方に帰ってきたのか？」

「ああ、そんなところだ」

朝食のテーブルを三人が囲んでいた。  
アリアと遠山には、依頼クエストで学校を休んでいたと話した。

「あんたねえ、クエストするならワーダーのあたしに言つなさい  
よ。次、何も言わずにクエストしてたら、殴るからねー。」

「今日は蹴りが入りましたが」

変な方向に曲がった首を回しながら恨みがましく呟く。  
ただ、これ以上文句を言うと打撃だけでは済まなさそうだ。  
だつて、すでに銃に手を掛けます。

「それはそうとキンジ、頭のたんじぶはどうしたん?」

遠山は朝から頭をずっとと摩つててゐる、どこかにじぶつけたのだらう  
か?

「これはだな……」

「あたしとの特訓中にできたのよ」

原因是アリアだった。

「今、真剣白刃取りの練習しているの」

「へー、そうでつか」

面白い事をしているなと思いつつ、コップを傾けて水を飲む。

「口ウもやる？ 手伝つてあげる」

「ああ、別に良いよ」

軽い感じで受け流す。

「手伝つて、あ・げ・る！」

ん？ もしかしてこれって強制。

「出来れば遠慮したいんやけど……」

静かにコルトに手を伸ばすアリア。

「選ばせてあげる。するの？ それとも、やるの？」

答えは一択しかなかつた。

そして、その日の午後には二人の男が倒れていた。

「だらしないわね」

「木刀つて結構痛いぞ！ 何で全力で振り下すねん！？」

「私はいつでも全力なのよ」

「味方に全力を出してどうする！？」

「意外と気持ちいいのよ」

やばい、コイツは真正のドジだ！  
何か快感を覚えつつあるぞ！－

「もう少しあやってみる？」

今度は鞭うなむちを取り出してきた。

「それ、もはや剣とちゃう！」

「仕方ないわね」

何とか思いとどまつてくれたようだ。  
隣に倒れている男、遠山はまだ起きてくれる気配が無い。  
仰向けになつて大の字で倒れている。

「起・き・な・さ・い・よ・－・」

いきなり馬乗りになつて往復ビンタを繰り出すアリア。

「ちよい、何してんねん！？」

「いや、何処かで寝たら死ぬつて登山の本に書いてあつたから」

「何処かは雪山やし！ そんな起こし方したら遠山が死ぬぞ！－・」

「コイツは困難では死なないわよ」

自信ありげに胸を張るアリア。

そんなに逸らしてもガツカリが強調されるだけなのに……

「あんた、今あたしに失礼なこと考えなかつた？」

「いえ、別に……」

人の思考も読めるのだろうか。

そんなことを考えていると、遠山が低い声で何かを呟く。

「ほら、死なないじゃない」

何を言っているのか分からぬため、耳を澄ます。

「その川を渡ればいいのか？ 簡単だな……」

あれえ？

「六万だつて？ 相場は六文だろ……」

ヤバい領域に彼は足を踏み入れていた。

「アカン！ その川を渡るな遠山…… 戻つて来…………！」

必死で振り起こす。

その十数分後、遠山は何とか息を吹き返した。

「不思議な夢を見ていた気がする」

起き上がった遠山はそんなことを言っていたが、深くは思い出させないようにした。

そんなこんなで教務課の前を通過していく。

ふとアリアが、何かを見つけたのか立ち止まる。

康介と遠山を手招きで呼ぶ。

掲示板を見ると一枚の紙が貼り出されていた。

「生徒呼び出し 2年B組・星伽白雪 ほじやく しゆきゆき」

その張り出しを見たアリアの目は、悪い目になっていた。  
直感で分かる、次にいつ事は口クでもない事だ。

「キンジ、コウ、今から教務科に潜入よ  
——オーマイガット!!」

案の定、突拍子も無く最悪の言葉だった。

**依頼は無料 弾代は有料**

細いダクトの中を3人が進んでいる。アリア、康介、キンジの順番だ。

「アリアもコウも速いな」

遠山が少し遅れ気味だった。

「まあ、慣れどるしな」

まあ、いろんな作戦で内部に侵入して奇襲、つていつのもあったから。

「得意なの。アサルト強襲科の中で一番早いのよ」

「だらうと思つたよ」

遠山がさも納得したように言つた。

「なんで?」

振り向かずにアリアが訪ねる。

「邪魔になるものが無いから」

「何の事?」

身の危険を感じて後退しようとしたが、遠山の口が速かつた。

「胸」

「ドス！ ガス！！ ガンガン！！！」

「ミシミシミシ……」（頭蓋骨にひびが入る音）

「ストップ！ アリアストップ！！ 僕や、豊和や！！」

「あ、ごめん」

顔を掴んでいた手が離れる。

どうやら遠山が後ろにいると思つていたのだらう。

「キンジ、後で裏な？」

お喋りなコイツには後でお灸をする必要があるみたいだ。ドスのある声で宣言しておぐ。

そういうしていると田的の部屋に着いたみたいだ。二人の人間が話し合っている。

一人は白雪、もう一人は教師の綴 梅子。  
雰囲氣からして真剣な話をしているみたいだ。

「星伽いい、いい加減護衛を付けろって。  
魔劍が狙つてるって諜報科やＳＳＲだつて予測してんだからー」

「はい、わかっているんですけど……」

やや、力なさげに返答する白雪だった。

（テュランダル？）

聞いたことの無い言葉に疑問が浮かぶ。

アリアに尋ねようと前を見る。

何故かアリアの顔は真剣になつていた。

「もうすぐアドシードだから、その間だけでも校内から護衛を選んだげようか？」

「でも……」

白雪の言葉はダクトからアリアによつて遮られた。

「そのボディーガード、あたしがタダでやつてあげる……」

何言つてんだあの野郎。  
依頼受けるときは相談とか抜かしてたのに、真つ先に無視しやがつた。

「そこは入り口じゃない。あっちだ、出直して来い」

「そう」

綴がそう言つと、一度部屋を出て、また部屋に入りなおすアリア。  
きちんと、出入り口である扉から。

「はい、そこのダクトに残つてる奴も出でへる」

あつさつと見抜かれて降りる羽目になる。

3人が並ぶと、綴は品定めするように一人一人を見た。

「悪くは無いな、こいつ等でいいじゃね」

問題なしといった感じで、白雪に振る綴。

しかも、まだ何も言つてないのに頭数に含まれていた。

「嫌です、キンちゃんは良いとして、アリアと一緒にるのは嫌です  
！」

「うやう一人は犬猿の仲じゃ。」

「護衛させないとこつを撃つわよー。」

いきなりガバメントを遠山に向ける。  
しかも、目は結構ガチ本気だ。

護衛が護衛を殺してどうする？

心中で突っ込むが誰も聞く者はいない。

「あ……キンちゃん、卑怯よアリア」

しかも、人質として成立しちゃったよ！  
どうなってんだよ、この状況！？

その後、しぶしぶ条件をのんだ白雪を3人で護衛する「ことになつた。」

ついで

「何でうなるとや？」

部屋の中には着替えや化粧品その他諸々を持つてきた白雪が居た。  
護衛するためにここで泊るらしい。

「ま、ええわ。俺は出でくわ

襟首をアリアに掴まれる。

「却下。護衛が対象から目を話してどうするのよ？」

「二人も居たら良いだろ？」

その折、部屋に電子音の呼び鈴が鳴った。

「あたしが行く。あんたはここに居なさい」

アリアが扉を開ける。

だが、そこに人は居なかつた。

「？」

いや、アリアの向こうに少しだけ頭が出ている。  
亜麻色の髪が目に見えた。

「うりやー、『ウさん来ちゃいました』

どつかの誰かさんのように、右手に旅行鞄、背中には銃を負つ  
ている。

銃も全部持つてきたようだ。

「あんた、確かライカだつたっけ？」

アリアが確認するように囁く。

「うりゅ、そうです」

「何しに来たの？」

「うりやあ、泊まりに来ました

瞬間、康介は固まつた。

「やつぱり一人は寂しいです。だから、来ちゃいました」

「来ちゃいました、じゃねえわ。男子寮に何しにきとんじや！」

「うりゅ？ 「ウセん」の前私の部屋に泊まりましたよ？」

「それは

「

後ろを見ると遠山と白瀬が、前を見るとアリアが白い皿で一皿を覗いていた。

その後、1時間ほど説明する羽田になつた。

結果どうなつたのかといふと。

ライカが護衛に加わつた、男はソファで寝ることになつた。

さりに厄介な問題が出た。

ちよつとこつちに来いと言われて、アリアに連れられ寝室に入る。他の3人は居間に居る。

「あんた、銃はP210とSpecterよね？」

「ああ、せやで」

「じゃあ、三日以内に45口径の拳銃を用意しなさい」

「はあ？ なんで？」

「何となくよ、できればガバメント・シリーズがいいわ

おつと、ついに装備の変更まで命令されてしまった。

「弾薬も共有できるし、それがいいと思つの」

「やつたら、お前が変える。コートナラーパラで、ガバ

メントに似てるで?」

「あくまでも、45口径なの! これ絶対!」

結局、康介が折れたのだった。

携帯端末で本部の銃器課にいる木山軍曹につなげる。

「ようヴェスパ3、どうした?」

「單刀直入でいうと、イスイス関係の銃で45口径つてある?」

木山軍曹は特務零中隊専属の銃技師である。銃が好きな彼は、色々な銃を取り扱えるという理由で所属している。

要望に合つた銃を揃えてくれる、無くてはならない人物だ。

「あるぞ、シグアームズのGSRがそうだ。すぐ」「送る」「ありがと!」

一日後にその銃は届いた。

そのケースの中に一通の手紙があった。

零中隊で・45ACP弾は多く取り扱っていない。武僧として自費で調達するよ! て

「ぬおああああああ!..」

その紙を真っ二つに引き裂いて絶叫した。

今回の依頼に本部からの弾薬支給は無く、報酬も無い。あるいは支出だけだった。

## 捕えられない的

AM 6・38

昨日届いた新しい銃を試射するために、射撃場に来ていた。これから使う銃に慣れる必要があるからだ。

そして、そこで一人の顔見知りと出会ひ。

無表情・無感情の代名詞と言われるレキだった。

以前の事件で一度だけ行動を共にした。

その時使っていた狙撃銃ドラグノフを背負っている。

「よひ、おはよ」

無視するのもよくないと思い、軽く声をかけてみる。さて、挨拶は返してくれるのだろうか？

「おはようございます、豊和さん」

意外と普通に返事が来た。

「何しに来たん？」

「狙撃の練習をしようと思つていました」

そう答えるとレキは射撃場内の射手位置に着く。

遅れて入った康介も少し離れたところで位置に着いた。

ドラグノフ特有の金属的な発砲音が鳴り響く。

しかし、GSRを取り出して遊底を前後させる。

数メートル先の的の中心を狙つて引金を引く。

いかにも45口径弾を撃つたという感触を感じる。

排莢口からリムレスの薬莢が飛び出していく。それが、床に落ちて一定のリズムを刻んだ。

200発は撃つただろう。

あと、五倍ほど打ちたいが元々がSIGの銃でもあって命中精度も高い。

作動性も安心できそうだ。

ていうかよく見ると銃は一度手を加えられた跡がある。おそらく木山軍曹が調整していくくれたのだろう。

銃を仕舞つて、置いてある簞で空薬莢を集めしていく。  
その折、レキも射撃を終えたみたいだ。

「終わつたんか？」

「はい、終わりました」

レキも薬莢をかたずける為に籌を取り出そうとする。

「そつちの薬莢も集めるから退いてみー」

「…… もうお願いします」

少し迷ったそぶりを見せた後、快諾してくれた。

レキはそんなに撃つてないのか、回収はすぐに終わる。

「ありがとうございました」

「別にお礼される程やないけど」

向き合って初めてレキが小さいと、いう事に気が付いた。アリアやライカより少し背が高いが、それでも小柄な方だ。

礼を言つたレキはそのままどこかへ歩いて行つた。特に話しかける用もなかつたので、康介は話しかけなかつた。

初めて会つたときは無口な人間かと思つたがそうではないらしい。自分からは話さない物静かな人で、きちんとした言葉遣いのお淑やかな少女だった。

（物静かやし、アリアとは全然ちやうなー。  
アイツも見習つてくれたらええんやけどな）

本人が聞いたら風穴では済まない事を考へてしまつた。  
そんなことを思いつつ、手に持つてゐる穴だらけの紙を見る。

（全然アカンな……）

一発も中心にあたつていない。  
それどころか黒丸の枠外に穴を開けてしまつてゐる。

まるで、素人の射撃だった。

自分でもおかしいと思つ。

原因は分かつていて、迷つていてるんだ。

あの紅い髪の少女に負けて、ベルヴァアという女にも負けた。

その時、敵に言われた言葉が今でも頭の中で浮かんでは消えていく。

『あなたは何故戦う？ 理由も無いのに私を邪魔しないで！』

『何が違うのさ？ 人を殺して生きてきたんだろう？ 人を殺すために生きてきたんだろう？』

自分は何のために生きているのだろうか？  
生きている理由は何だ？

『飯を食べるため？ 本を読むため？ 息をするため？

それとも

やはり、人を殺すためなのか？  
自分は生きていて正しいのか？

いくら考へても答えが出ない。

考えれば考えるほど頭が痛くなるだけだった。

その後は、何事も無く、襲つて来る者もおらず。  
平凡に一日は過ぎる。

そんなことは無かつた。

アリア、白雪という二人が一緒に場所に居たら無事に一日が過ぎない。

今も二人は睨み合っている。

原因はこうだ。

夕食時、アリアの前にだけ料理が出されなかつた。  
しぶしぶ白雪が出したのはご飯一杯。  
依頼解消を盾にされたのでアリアは珍しく耐えた。

ここまで、アリアは多分はらわたが煮えくり返つていただろう。  
その後白雪が脱衣所にいる遠山に突撃し、何故か脱ぎだした。  
そして、それをアリアが目撃した。

ここでついにアリアの堪忍袋の緒は激しく切れたのだろう。  
一つの銃がスカートの中から現れる。

やつと、復旧したばかりの部屋が再び壊れしていく。

「やめろアリア！－」

荒れ狂う銃弾の中から遠山の悲痛な叫び声が聞こえる。  
何とアリアは白雪ではなく裸同然の遠山に銃を向けていたのだ。

本気で身の危険を感じたのだろう。

遠山は防弾性の物置に隠れずに、東京の海へとダイブした。

まだ肌寒い季節の中、四月の海に。

## 祖国を護つた東と西の銃

♪♪♪♪♪。

小さな電子音が鳴る。

「38度1分、完全に風邪ひいたな」

ベッドの上で横になつて寝ている遠山が体温計を枕元に置く。

「まあ寝とき。先生に伝えとくから、安心しどけ  
「ああ、頼む」

シャワーを浴びた直後に海へ飛び込んだ遠山は、風邪をひいた。医者を勧めたが、薬は効かない体质らしく寝て治すらしい。

「お大事にな」

それだけ言って登校の準備を始める。  
その後寮を出たのは時間ギリギリだった。

白雪が遠山の看病をすると言つて放れなかつたからだ。  
本来なら任しても問題は無い。

だが、今白雪は警護対象だ。  
動けない遠山と一緒ににするのは良くないと考えたので止む無く連れて行つた。

それ以前に遠山と白雪が一人だけだと、アリアが暴走を起こしそうなので。

といつ理由もあつた。

そしてその日の午後。

白雪の護衛はレキとライカに任せてアリア、康介は買い物をしていた。

「もうこやアリア、何で昼間おらんくなつたん？」

この日の午後、時間でいうと13時頃にアリアは学校を出て行つたのだ。

そして、15時半頃に戻つてきた。

「べ、別に何でもないわ！」

何故か必要以上に動搖してアリアは先に行つてしまつ。とくには気にせず、あるスーパーに入った。

何でも今日はアリアが夕食を作つてくれるらしい。おそらく、昨日の白雪に対抗するのだろう。

必要な物を買い終えて、帰りの道に着く。

その途中、人気のない区画を通過ことになつた。

新しくできた建物が立ち並び、各種販売店が開店準備をしている区だった。

「ここに新しいゲーセンができるんか～」

「ここも新しくなるのね

改装中と書かれた看板を掲げている店を見ながら、適当な会話をする。

面白そうな店を見つけたとき、後ろに何かが落ちた音がした。

「ん？」

振り返ると、それは物なんかじゃなかつた。  
紅い髪が軌跡を描きながら下りてくる。

「紅尻尾！？」

驚くよりも早く、左脇から銃を抜き出す。

だがそれよりも早く、相手の回し蹴りが康介を横に吹き飛ばした。  
立ち上がった時には、目の前に敵は迫っていた。

「がはっ！！」

強烈な掌底を無防備になつた腹部に叩き込まれ、目の前が真つ暗になつた。

そのまま、康介は地面に崩れ落ちた。

「あんた何者よ！？」

二丁のガバメントを、撃ちながらアリアが叫ぶ。  
後ろに飛んで紅い髪の少女は回避する。

そのまま、二丁のトカレフを腰から抜き出した。  
素早く動き回りながら、アリアめがけて銃を撃つ。

アリアも地面を蹴つて横に素早く動いて回避する。

その動きを追うように、トカレフの銃口が動いていく。

だがアリアの銃、ガバメントも同じく正体不明の敵を追いかけている。

45口径の弾頭が周囲の建物に穴を開けていく。

どちらも19世紀に設計され、長年に渡って軍の主力を務めた名銃。

チンピラが使う銃と言つ輩もいるが、それは全く的外れな評価だ。

一撃で相手を行動する絶大なストッピングパワーを持つガバメント。

軟鉄を弾頭の強力小口径弾を撃つ、貫通力と信頼のトカレフ。

東と西の名銃が、今この場で激戦を繰り広げていた。

物陰から物陰へと移動し、両手に持つ銃を撃ちあつ二人の少女。

離れたかと思うと、一気に格闘戦に持ち込む。

次の瞬間には二人の立ち位置が変わっている。

地面には複数の薬莢が散らばり、空になつた弾倉が捨てられている。

周囲の物を破壊しつつ、その銃撃は続けていた。

「まずいわね……あのバカは寝てるし」

弾倉を取り替えるために物陰に隠れたアリアが呟く。トカレフの装弾数は自分の持つ銃より一発多い八発。

武僧は人を殺せない、だが相手は確實にこちらを殺そうとしている。

る。

物陰から相手の様子を窺う、相手も身を潜めているみたいだ。

「あつ！？」

一気に距離を詰めて近接戦で仕留めようと切り込んだ。

だが、相手が姿を隠していると思つた場所に人は居なかつた。

アリアが敵の注意を引いているおかげで、康介に意識を取り戻す時間が生まれた。

だが、そこにアリアとの戦闘から戻つた敵が再び迫つている。

一発の銃弾が康介のもたれている電柱に穴を開けた。

手にしたP210で反撃するが、弾丸は相手を捉えなかつた。

一階から飛び降りてきた、敵は目の前に着地する。  
この距離だと撃つより殴る方が速い。

銃を持つていらない左手で相手を殴りつける。  
相手も予想していたのか、右手で綺麗に捌さばかれた。

「あなたは邪魔なんです！」

「勝手に襲つてきてのは、お前だろ！－！」

「何故あなたはクドリヤフカから離れない！　あなたも、あの人を戦わせるんですか！？」

「じゃあ、お前は何でアイツを襲う－？　襲えばアイツは戦うことになるだろ！－！」

「そうしないと、姉さんを倒さないといけないんです！－！」

「何故だ！？　お前は何を守る為に戦つている！？」

お互に強烈な蹴りと拳を繰り出して、傷だらけになりながら叫ぶ。鮮血が地面に飛び散っていた。

「あなたこそ何で戦つているんですか！？」

「あなたは私の姉さんを殺した！　また、姉さんを奪つつもりですか！？」

「言つている意味が分からん！　何が言いたいんだ！！　お前は一体誰なんだ？」

力の籠つた彼女の右ストレートが顎を撃ち抜いた。足まで衝撃が走る。

相手が距離を取つて、こちらに拳銃を向けた。

一度も脳まで来る打撃を受けた康介は動くことができなかつた。

その時、アリアの撃つた銃弾が割つて入つた。形勢は不利と見たのか、相手は身を翻した

「私はゼッサーべ！　そう姉さんに伝えときなさい！！」

そう康介に叫んで、スマートクグレネードのピンを抜いた。

大量の煙があたりを包み、ゼッサーべと名乗つた少女が走り去つた音がする。

追いかけることは不可能だつた。

手ひどくやられたが、致命的な傷は無い。

数分も休むと、歩けるほどには回復する。

アリアは何も聞かず、何事も無かつたかのように家へと歩いていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3480z/>

---

緋弾のアリア × 特務零中隊

2012年1月5日23時50分発行